「60 分で分かる創世記」

1. はじめに

(1) 「60 分で分かる〇〇」のシリーズを開始する。

①1 節 1 節の解説も重要であるが、鳥瞰図的な理解も必要である。

②その場合重要なのは、「センス・オブ・プロポーション」である。

(2) 創世記について

①旧約聖書の最初の五書は、本来は「ひとつの書」として書かれたものである。

②最初の五書の呼び名

＊英語では「the Pentateuch」（5 つの筒）と言われる。

＊ユダヤ人たちは、「トーラー」（教え）と呼ぶ。

＊一般的には、「モーセの五書」である。

③著者はモーセである。

＊モーセが誕生する前の情報もある。

＊神からの啓示があった。

＊残された記録があった。

＊イエスは、モーセが書いたと認めている（ヨハ 5：45～47）。

④執筆の目的

＊カナンの地に入国する前のイスラエル人のために書いた。

＊彼らは、イスラエルの歴史や出エジプトの歴史を知らない世代である。

＊何のためにカナンの地で生きるのかを知らなければならない。

＊モーセは彼らに、以下のことを教えようとした。

・天と地の始まり

・人類の始まり

・罪の始まり

・イスラエル民族の始まり

・神の人類救済計画の始まり

2. アウトライン

(1) 人類一般の歴史（1～11 章）

①天と地の創造（1～2 章）

②アダムとその家族（3～5 章）

③ノアとその家族（6～11 章）

（2）イスラエルの歴史（12～50 章）

①アブラハム（12：1～25：18）

②イサク（25：19～26：35）

③ヤコブ（27：1～36：43）

④ヨセフ（37：1～50：26）

3．結論

（1）創世記とキリスト

（2）創世記と黙示録

創世記を通して、あらゆることの始まりについて学ぶ。

Ⅰ．人類一般の歴史（1～11 章）

1．天と地の創造（1～2 章）

（1）地の強調

「初めに、神が天と地を創造した」（1：1）

①天使の創造、天使の堕落などのテーマは、省略されている。

②天と地の創造に言及しながら、強調点は地にある。

③地上における神の主権が、これから展開されるテーマとなる。

④イスラエルの民にカナンの地を約束されたのは、全地の所有者である。

（2）人間の創造

「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」（1：26～27）

①人は、神の「かたち」に造られている。

②人は、創造の冠である。

（3）唯一の禁止令

「神である【主】は人に命じて仰せられた。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ』」（2：16～17）

①神への従順は、人を自由にする。

（4）結婚

「神である【主】は仰せられた。『人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう』」（2：18）

①結婚制度の始まり

②女性は男性の助け手として創造された。

2. アダムとその家族（3～5 章）

(1) 人類の堕落（3：1～24）

①蛇に乗り移ったサタンの誘惑

・サタンの起源に関しては、触れられていない。

②霊的死の経験

・園の木の間に身を隠した。

③罪の裁きと救いの約束

(2) 原福音（3：15）

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく」（3：15）

①「おまえの子孫」とは、反キリストのことである。

②「女の子孫」とは、キリストのことである。

③キリストが反キリストに勝利することが約束された。

④「女の子孫」が今後の展開の主題である。

(3) アダムとエバの子孫たち（4～5 章）

①カインとアベル

②カインから広がる子孫たち

③セツの誕生

④神は、アダムの息子たちの中からセツを選ばれた。

＊「選び」も、重要な主題である。

3. ノアとその家族（6～11 章）

(1) 洪水（6～10 章）

「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」（6：5～6）

①神は、セツの子孫の中からノアを選ばれた。

②当時の世界は滅ぼされ、人類の歴史は 8 人の人たちで再スタートを切った。

＊ノア、セム、ハム、ヤペテ、そして彼らの妻たち

（2）バベルの塔（11：1～32）

①人類は、地上に広がらずに、一か所に集まってバベルの塔を建てた。

②神が介入され、言葉を混乱させた結果、人々は全地に散って行った。

③神の人類救済計画は、挫折していない。

④神は、ノアの子孫の中からアブラハムを選ばれた。

Ⅱ．イスラエルの歴史（12～50 章）

1．アブラハム（12：1～25：18）

（1）アブラハム契約

「【主】はアブラムに仰せられた。『あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」（12：1～3）

①土地の約束

②子孫の約束

③祝福の約束

（2）アブラハムの選びの本質

①救いのための選びではない。

②全人類を救うための方法としての選びである。

（3）この契約は、無条件契約である。

①アブラハムとその子孫の失敗があっても、破棄されない。

②神のみが責任を負う片務契約である。

2．イサク（25：19～26：35）

（1）イシュマエルではなく、イサクが選ばれた。

①イサクは、約束の子である。

②アブラハムは、イサクを捧げよという命令に従うことによって、自らの信仰

を証明した。

（2）アブラハム契約は、イサクに引き継がれた。

①「アブラハム、イサクの神」

3. ヤコブ（27：1～36：43）

(1) エサウではなく、ヤコブが選ばれた。

①ヤコブの肉的な性質が神によって取り扱われ、霊的な性質が成長した。

(2) アブラハム契約は、ヤコブに引き継がれた。

①「アブラハム、イサク、ヤコブの神」

(3) ヤコブに 12 人の息子たちが与えられた。

①彼らは、12 部族の始まりとなった。

②特に重要なのが、ヨセフ族とユダ族である。

③ヨセフ族は長子の部族となり、2 部族を輩出した。

＊マナセ族とエフライム族

④ユダ族は、メシアを世に出す家系となった。

4. ヨセフ（37：1～50：26）

(1) カナン文化との同化を防ぐために、ヨセフが用いられた。

①彼の人生には、神の摂理が働いていた。

②兄たちの悪意のゆえにエジプトに売られたが、それは神の計画でもあった。

(2) 神は、イスラエルの民を隔離した状態で大きく育て、カナンの地に戻そうとされた。

①イスラエルの民は、エジプトで 400 年間奴隷になった。

②しかし、民族の記憶としてカナンの地への帰還を忘れることはなかった。

「ヨセフは兄弟たちに言った。『私は死のうとしている。神は必ずあなたがたを顧みて、この地からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地へ上らせてくださいます。』そうして、ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、『神は必ずあなたがたを顧みてくださるから、そのとき、あなたがたは私の遺体をここから携え上ってください』と言った。ヨセフは百十歳で死んだ。彼らはヨセフをエジプトでミイラにし、棺に納めた」（50：24～26）

結論

1. 創世記とキリスト

(1) 神はことばによって天地を創造した。キリストは神のことば（ヨハ 1:1～5）。

(2) キリストは、最後のアダムである（ロマ 5：1～21、1 コリ 15：45）。

(3) キリストは、「女の子孫」である（ガラ 3：19、4：4）。

(4) アベルは、キリストの型である（ヘブ 11：4、12：24）

（5）メルキゼデクは、キリストの型である（ヘブ 7～10 章）。

（6）小羊は、キリストの型である（ヨハ 1：29）。
（7）ヨセフは、キリストの型である。

2．創世記と黙示録
（1）神は天と地を創造された。
①神は、新しい天と新しい地を創造される（黙 21 章）。

（2）サタンは人類を攻撃した。
①サタンは最終戦争で敗北する（黙 20：7～10）。

（3）神は闇と光を創造された。
①いつか闇は消え去り、光だけとなる（黙 21：23、22：5）。

（4）神は水の集まった所を海と名づけられた（創 1：10）。
①海は消え去る（黙 21：1）。

（5）神は人をエデンの園（シャカイナグローリー）から追放された（創 3：24）。
①神は人をシャカイナグローリーの内に招かれる（黙 22：1）。

（6）神は人を「いのちの木」から遠ざけた（創 3：22）。
①人は「いのちの木」から食べることができるようになる。
「自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都に入れるようになる者は、幸いである」（黙 22：14）

まとめ：
（1）創世記を理解したなら、それまでの人生観を一変せざるを得なくなる。
（2）キリスト教は、世界観であり、歴史観である。
（3）創世記によって、霊的体幹を強くすることができる。

60 分でわかる旧約聖書（2）「出エジプト記」

1. はじめに
   (1) 創世記に続いて出エジプト記を取り上げる。
      ①旧約聖書の最初の五書は、本来は「ひとつの書」として書かれたものである。
      ②著者はモーセである。
         ＊モーセ自身が体験したこと
         ＊神からの啓示
         ＊残された記録
         ＊イエスは、モーセが書いたと認めている（ヨハ 5：45～47）。
      ③執筆の目的
         ＊カナンの地に入国する前のイスラエル人のために書いた。
         ＊彼らは、イスラエルの歴史や出エジプトの歴史を知らない世代である。
         ＊何のためにカナンの地で生きるのかを知らなければならない。

   (2) 出エジプト記について
      ①創世記とつながっている。
      ②モーセは、出エジプト記の中で、以下のことを教えようとした。
         ＊出エジプトの出来事の経緯
         ＊神と交わした契約の内容
         ＊幕屋と祭儀が与えられている理由
      ③出エジプト記には、キリストの型がたくさん隠されている。

2. アウトライン
   (1) エジプトで苦しむイスラエル（1：1～12：36）
   (2) エジプトからシナイ山に移動するイスラエル（12：37～18：27）
   (3) シナイ山で神と契約を結ぶイスラエル（19：1～40：38）

3. 結論
   (1) キリストの型
   (2) 3 つの脱出

出エジプト記を通して、究極的な解放について学ぶ。

Ⅰ．エジプトで苦しむイスラエル（1：1～12：36）

1. 解放者モーセ（1：1～4：31）

（1）エジプトは、人類史上最初の反ユダヤ主義の国になった。

①過酷な労働

②男児殺害命令

③ナイル川で溺死させよという命令

（2）モーセの生涯

①誕生から 40 歳まで

＊エジプトの王女に拾われ、王宮で帝王学を学んだ。

＊自力で解放者になれると思った時期。

②40 歳から 80 歳まで

＊ミデヤンの荒野で羊飼いとしての体験を積んだ。

＊自分の無力さを学んだ時期。

③80 歳から 120 歳まで

＊解放者として用いられる時期。

（3）出エジプトの出来事は、アブラハム契約に基づくものである。

「神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」（出 2：24）

「神は仰せられた。『ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。』また仰せられた。『わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した」（出 3：5～6）

①イスラエルの民には、全人類を祝福するという使命が与えられている。

②エジプトを脱出してカナンの地に入るのは、その使命のためである。

③ヨセフは、この日が来ることを予知していた。

2. パロと対決するモーセ（5：1～7：7）

（1）モーセはパロに「民を去らせよ」と要求した。

①その結果、事態は悪化した。

②民は、モーセとアロンに抗議した。

（2）モーセは【主】に窮状を訴えた。

①【主】は、やがて分かるようになると答えた。

②アロンが、モーセの代弁者として任命された。

3. 偶像を裁く【主】の力（7：8～12：36）

（1）モーセは、再度パロと対決する。

①10 の災害が下るが、これはすべてエジプトの偶像を裁くものである。

（2）第 10 の裁きが最も重要なものである。

①パロの初子から、奴隷の初子、そして家畜の初子に至るまで、みな死んだ。

②パロはエジプトの最高神であり、その初子は王位継承者である。

（3）イスラエルの民は安全に守られた。

①子羊の血を 2 本の門柱とかもいに塗った。

②裁きの天使は、この血を見て、その家を過ぎ越した。

（4）この時、過越の祭りが制度化された。

①メシアの贖いの死を予表する祭りである。

Ⅱ．エジプトからシナイ山に移動するイスラエル（12：37～18：27）

1. エジプトを脱出するイスラエル（12：37～13：22）

（1）徒歩の壮年男子だけで約 60 万人いた。

①アブラハム契約の子孫の約束が成就しつつある。

②イスラエルの民は、430 年間エジプトに滞在した。

（2）【主】は、予定外のコースに民を導いた。

①近道であるペリシテ人の国の道には導かなかった。

＊民が、戦いを恐れてエジプトに引き返すことのないように。

②葦の海に沿う荒野の道に回らせた。

③雲の柱、火の柱が民の前を進んだ（シャカイナグローリー）。

2. 葦の海を渡るイスラエル（14：1～15：21）

（1）イスラエルの民は、この奇跡を体験する必要があった。

①この奇跡は、モーセのリーダーシップを証明するものでもある。

②エジプトの軍勢は、溺死した。

＊これは、アブラハム契約の付帯条項の成就である。

（2）イスラエルの民は、大いなる解放のゆえに、【主】の御名をたたえた。

①この解放劇によって、イスラエル国家が誕生した。

3. シナイ山まで旅をするイスラエル（15：22～18：27）

(1) 民の不平と神の備え

①水に対する不平

②食物に対する不平

＊うずらとマナの供給

③岩から出た水（レフィディム）

(2) アマレクとの戦い

①悪魔との戦いの型

(3) 舅のイテロの助言

①モーセは、千人の長、百人の長、50 人の長、10 人の長を立てた。

②権限移譲により、モーセの負担が軽減された。

Ⅲ. シナイ山で神と契約を結ぶイスラエル（19：1～40：38）

1. シナイ契約（19：1～24：18）

「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に載せわたしのもとに連れて来たことを見た。今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」（出 19：4～6）

(1) 祭司の王国として機能するために必要なこと

①神の義なる律法

＊十戒を含む 613 の律法（モーセの律法）

＊律法は、イスラエルの民に生きる道を示す。

＊と同時に、自らの罪を示す。

②礼拝の場

＊幕屋

③祭司と祭儀法

＊罪からの清めを得るための方法

(2) シナイ契約は条件付き契約であり、その契約条項がモーセの律法である。

①モーセの律法は、律法による救いを教えたものではない。

②救いの方法は、信仰と恵みである。

＊当時の人々の信仰表現は、モーセの律法への従順である。

2. 幕屋のデザイン（25：1～31：18）
   (1) 幕屋は、人が神に近づく方法を細かく規定している。
      ①至聖所には、シャカイナグローリーがあった。
      ②全人類→イスラエルの民→レビ族→アロンの家系→大祭司

   (2) 幕屋全体がキリストの型である。

3. 金の子牛事件（32：1～35）
   (1) モーセが 40 日間山頂にいる間に、民は偶像を作っていた。
      ①アロンにも責任がある。

   (2) シナイ契約は条件付き契約なので、契約は破棄された。

4. 契約の再締結（33：1～34：35）
   (1) モーセの執りなしの祈りの結果、再締結となった。

5. 幕屋建設と神の栄光（35：1～40：38）
   (1) 示されていた幕屋のデザインに従って、幕屋が建設された。
      ①至聖所の中に、シャカイナグローリーが輝いた。
      ②民が【主】が示した条件に合ったので、【主】は民の間に隣在された。

結論

1. キリストの型
   (1) 神の預言者モーセは、キリストの型である。
      ①ただし、民を約束の地に導いたのはモーセではなく、ヨシュアであった。
   (2) マナは、キリストの型である。
      ①いのちのパン
   (3) 打たれた岩は、キリストの型である。
      ①打たれたキリストによって、信者に聖霊が注がれた。
   (4) 過越の祭りは、キリストによる贖いの型である。
      ①小羊の血は、キリストの血の型である。
   (5) 幕屋は、キリストの型である。
      ①私たちは、キリストを通して父なる神に近づく。

②キリストの内にシャカイナグローリーが宿っている。

2. 3 つの脱出

はじめに：出エジプト記は、ギリシア語の七十人訳では「エクソドス」である。

①その意味は、「脱出」「出発」である。

②この書は、イスラエルの民がエジプトを脱出した記録である。

③「エクソドス」という言葉から、3 つの脱出について考えてみる。

(1) 歴史的事実としての、脱出がある。

①神の力によるエジプトからの解放劇

(2) 十字架の上で為されたキリストの贖いの業

「栄光のうちに現れて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである」（ルカ 9：31）

①「ご最期」と訳された言葉は、エクソドスである。

②キリストの死は、私たちに罪からの解放をもたらすものとなった。

(3) 信者の死

「私が地上の幕屋にいる間は、これらのことを思い起こさせることによって、あなたがたを奮い立たせることを、私のなすべきことと思っています。それは、私たちの主イエス・キリストも、私にはっきりお示しになったとおり、私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。また、私の去った後に、あなたがたがいつでもこれらのことを思い起こせるよう、私は努めたいのです」（2 ペテ 1：13～15）

①ペテロの晩年の言葉である。

②「去った」と訳されている言葉が、エクソドスである。

③信者にとっては、死は「脱出」であり「旅立ち」であり、「解放」である。

④不信者の死は、その対極にある。

(4) 出エジプト記を学ぶことは、

①神が偉大な力をもって歴史に介入されたこと、

②キリストの死によって信じる者は罪から解放されたこと、

③やがて自分に訪れる肉体の死が地上のあらゆる束縛からの解放であること、

を確認する作業である。

60 分でわかる旧約聖書（3）「レビ記」

1. はじめに

（1）創世記、出エジプト記に続いてレビ記を取り上げる。

①旧約聖書の最初の五書は、本来は「ひとつの書」として書かれたものである。

②著者はモーセである。

＊カナンの地に入国する前のイスラエル人のために書いた。

＊彼らは、イスラエルの歴史や出エジプトの歴史を知らない世代である。

＊何のためにカナンの地で生きるのかを知らなければならない。

（2）文脈の確認

①創世記は、人類の罪と、その罪に対する裁きについて教えている。

②出エジプト記は、エジプトの束縛からの贖いの書である。

＊イスラエルの民は、神と契約を交わした。

＊イスラエルの民には、幕屋と祭儀が与えられた。

＊イスラエルの民は、神の宝の民、聖なる国民、祭司の国である。

③レビ記は、聖い神との交わりを維持する方法を教えている。

（3）レビ記という名称

①ヘブル語聖書「ヴァイカラ」（And He called）

②七十人訳「Λευιτικόν」

③英語訳「Leviticus」（レビ人に関する事項という意味）

④ヘブル語の別名「トーラ・コハニム」（祭司たちの律法）

⑤幕屋と祭儀法を正しく運用するための祭司のマニュアルである。

⑥聖なる国民、祭司の国として、いかに生きるべきかを教えている。

（4）レビ記の特徴

①聖書の中で最も難解な書である。

②レビ記ほど、神が直接語っておられる書は他にはない（幕屋の中から）。

③レビ記の中には、キリストの型が多く登場する。

④ヘブル人への手紙と並行して読むと、祝福は大きい。

2. アウトライン

（1）罪の処理のためのささげ物（1～10 章）

（2）汚れからの分離の命令（11～24 章）

（3）祝福の約束（25～27 章）

3．結論

（1）レビ 17：11

（2）ヘブ 10：1～18

（3）1 ヨハ 1：5～10

レビ記を通して、神に近づく方法について学ぶ。

Ⅰ．罪の処理のための捧げ物（1～10 章）

1．ささげ物（1～7 章）

（1）「ささげ物（コルバーン）についての規定」

①ささげ物とは、「自発的なささげ物」のことである。

②1：3～6：7 までは、ささげる人の視点から見た「ささげ物に関する規定」。

③6：8～7：36 は、祭司の視点から見た「ささげ物を取り扱う際の規定」。

（2）5 種類のささげ物

①全焼のいけにえ

＊口語訳は「燔祭」、新共同訳は「焼き尽くす献げ物」と訳している。

＊「全焼のいけにえ」と呼ぶのは、すべて祭壇の上で焼かれるから。

＊神の怒りを取り除くという意味がある。

＊ささげる者の信仰を見て、神は満足される。

②穀物のささげ物

＊口語訳は「素祭」、新共同訳は「穀物の献げ物」と訳している。

＊血の伴わないささげ物である。

＊通常は、血の伴った「全焼のいけにえ」に続いてささげられていた。

＊罪の赦しを受けた者が、神の恵みに感謝してささげる物である。

＊礼拝者から神への「贈り物」である。

③和解のいけにえ

＊口語訳は「酬恩祭」、新共同訳は「和解の捧げ物」と訳している。

＊感謝を表わす場合。祈りが答えられたことへの感謝（レビ 7：12～15）。

＊誓願、特にナジル人の誓願が完了した場合（使 21：23～26）。

＊自発的にささげる場合、何か予期せぬ良いことがあった場合など。

＊大動物は牛、小動物は羊ややぎ。

＊全焼のいけにえの場合とは異なり、鳥は含まれていない。

＊和解のいけにえは、後で宴会の食事として用いられる。

④罪のためのいけにえ

＊口語訳は「罪祭」、新共同訳は「贖罪の捧げ物」と訳している。

＊無知や不注意から罪を犯した場合にささげる物（民 15：22～31）。

＊誰が罪を犯したかによって、4 つに区分される。

・油注がれた祭司、つまり、大祭司の場合（4：2～12）

・イスラエルの全会衆の場合（4：13～21）

・上に立つ者の場合（4：22～26）

・一般の人の場合（4：27～35）

⑤罪過のためのいけにえ

＊口語訳は「愆祭（ｹﾝｻｲ）」、新共同訳は「賠償の献げ物」と訳している。

＊損害を与えた人に対して賠償するように命じられている。

・主の聖なるものに対する罪

・主の戒めに対する違反

・隣人に対する不正の罪

2．祭司の任命（8～10 章）

（1）祭司とささげ物の両方があって、神の前に受け入れられる聖いいけにえをささげることが可能になる。

①最初の大祭司になるのは、アロンである。

②アロンの 4 人の息子たちは、普通の祭司となる。

③以後、祭司職はアロンの家系から出ることになる。

（2）水によるきよめ

①アロンとその子たちが、祭司の装束を着ける前に、水で体を洗う。

（3）油による聖別

①幕屋とその中にあるすべてのものに油がそそがれた。

②祭壇とその用具全部、また洗盤とその台に油がそそがれた。

③アロンの頭に油がそそがれた。

④大祭司を「油そそがれた祭司」（4：3、5、16、6：22、出 30：30）と呼ぶ。

（4）シャカイナグローリーが天からの火という形で現れた。

①天からの火が、全焼のいけにえを焼き尽くした。

②神が、アロン的祭司制度を承認された。

Ⅱ．汚れからの分離の命令（11～24 章）

1．聖なる国民（11～20 章）

(1) 食物規定

①聖なる民がどのような食生活をすればよいのかが教えられる。
②道徳的、倫理的なきよさや汚れに関する教えではない。
③これは、祭儀的なきよさと汚れを扱ったものである。
④モーセの律法が与えられる前から、ささげ物に関しては、きよい動物と汚れた動物の区別はあった。
⑤食物としての規定は、レビ記にはいってから与えられたものである。

(2) その他の規定

①出産後の母親のきよめ
②伝染性皮膚病
③個人的なけがれ（男女別）

(3) 贖罪の日

①第 7 月の 10 日
②これまでのささげ物は、個人の罪を贖うためのものであった。
③贖罪の日のささげ物は、イスラエルの民全体の罪を贖うためのものである。
④この儀式によって罪が贖われたと信じた者にのみ、効力を発揮した。
⑤アロンは 2 頭の山羊のためにくじを引く。
⑥1 頭は「【主】のため」、もう 1 頭は「アザゼルのため」。
⑦「アザゼル」は、レビ記 16 章に 3 回出てくるだけで、意味は明確ではない。
　＊基本的な意味は、「解き放つ」ということである。
⑧「【主】のため」の山羊は、「罪のためのいけにえ」としてささげられる。
⑨「アザゼルのため」の山羊は、荒野に放たれる。

(4) 分離のための規定

①異教的な習慣の排除
②禁止されている性行為のリスト
　＊この中に、同性愛の禁止がある。「忌み嫌うべきこと」
③神への畏れ
④隣人愛の勧め
⑤神の民として、偶像礼拝を避ける。

2. 聖なる祭司（21～22 章）

（1）幕屋で仕える祭司には、一般の人々よりも厳しい基準が要求された。

①死体に触れてはならない。

＊誤って死体に触れることのないように、墓を白く塗るようになった。

②汚れた女（遊女や神殿娼婦）、離婚した女と結婚してはならない。

（2）大祭司の場合は、一般の祭司よりもさらに厳格な規定が適用された。

3. 聖なる祭り（23～24 章）

（1）7 つの例祭のうち、最初の 4 つは春の例祭、後の 3 つは秋の例祭である。

①その間に、約 4 ヶ月の例祭のない期間が入る。

②春の 4 つの例祭は、50 日の間にやってくる。

③秋の 3 つの例祭は、2 週の間にやってくる。

（2）これらの例祭はメシア（キリスト）の生涯を予表したものとなっている。

①春の例祭はメシアの初臨を、秋の例祭はメシアの再臨を予表している。

②中間期は、教会時代を予表している。

Ⅲ．祝福の約束（25～27 章）

1. 安息年の規定（25 章）

（1）この規定は、約束の地に入ってから実行すべきものである。

①6 年間は畑を耕作し、種を蒔き、作物を育てて収穫する。

⑦しかし、7 年目には土地を休ませる。

（2）安息年の規定が与えられている理由

①土地は神の所有であり、収穫は恵みによるものであることを覚えるため。

②土地そのものを休ませるため。

③負債を負っている人を解放するため。

＊奴隷になっている場合は、奴隷状態から解放された（申 15：1～11）。

2. 従順への祝福（26 章）

（1）3 つの基本を覚えていれば、主に忠実に歩むことができる。

①偶像礼拝の禁止

②安息日の遵守

＊安息日、7 年ごとの安息年、49 年に 1 回巡って来るヨベルの年

③聖所を恐れること

＊献げ物や祭司の規定を含めた【主】の礼拝に関わるすべてのこと。

（2）契約の民であるがゆえに、従順が要求される。

3. 誓約に関する律法（27 章）

（1）27 章は、補足説明に当たる章で、「誓願」に関する律法が付け加えられる。

①誓願とは、神が自分の願いを聞き届けてくださった時に、ある献ささげ物をすると約束すること（創世記 28：20 のヤコブの例）。

②物ではなく人身を献げると約束する場合もある。

＊預言者サムエルの母ハンナの例（1 サム 1：11）

③自分自身を献げると約束する場合もある。

（2）誓願に関する原則

①強制されるものではなく、あくまでも個人の自由意志で行なう。

②誓願は、軽々しくすべきものではない（箴言 20：25）。

③いったん誓願をした場合は、それを守らねばならない（申 23：21）。

結論

1. レビ 17：11

Lev 17:11　なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。

（1）「血」そのものに、人のいのちを贖う力が内在しているわけではない。

（2）神は、人のいのちを贖うための手段として「血」を選ばれた。

（3）血の働きによって、生命活動が維持されている。

（4）それゆえ、「肉のいのちは血の中にある」と言われているのである。

（5）動物の血を流すことは、そのいのちを犠牲にすることである。

（6）「血」は、「いのちによっていのちを贖う」という神の計画を教えるための手段となった。

（7）「血を食してはならないという規定」は、輸血を禁止したものではない。

2. ヘブ 10：1～18

Heb 10:1　律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。
Heb 10:2　もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をすることは、やんだはずです。
Heb 10:3　ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。
Heb 10:4　雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。
Heb 10:5　ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。／「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、／わたしのために、からだを造ってくださいました。
Heb 10:6　あなたは全焼のいけにえと／罪のためのいけにえとで／満足されませんでした。
Heb 10:7　そこでわたしは言いました。／『さあ、わたしは来ました。／聖書のある巻に、／わたしについてしるされているとおり、／神よ、あなたのみこころを行うために。』」
Heb 10:8　すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ(すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物)を望まず、またそれらで満足されませんでした」と言い、
Heb 10:9　また、「さあ、わたしはあなたのみこころを行うために来ました」と言われたのです。後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。
Heb 10:10　このみこころに従って、イエス・キリストのからだが、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。
Heb 10:11　また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。
Heb 10:12　しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、
Heb 10:13　それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。
Heb 10:14　キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。
Heb 10:15　聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。
Heb 10:16　「それらの日の後、わたしが、／彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、／主は言われる。／わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、／彼らの思いに書きつける。」／またこう言われます。
Heb 10:17　「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」
Heb 10:18　これらのことが赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用です。

(1) 旧約のいけにえは、一時的に罪を覆うだけで、罪を除き去ることができない。
(2) それらのいけにえは、キリストのいけにえを予表している。

（3）今やキリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげ、神の右の座に着座しておられる。

（4）私たちの心には、新しい律法が書かれている。

3. 1 ヨハ 1：5～10

1Jn 1:5　神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。

1Jn 1:6　もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。

1Jn 1:7　しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

1Jn 1:8　もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。

1Jn 1:9　もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

1Jn 1:10　もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。

（1）光である神と交わるためには、自ら光の中を歩む必要がある。

（2）レビ記の祭儀法は、今の私たちには適用されない。

（3）1 ヨハ 1：9 の約束は、現代のレビ記の規定である。

60 分でわかる旧約聖書（4）「民数記」

1. はじめに

（1）創世記、出エジプト記、レビ記に続いて民数記を取り上げる。

①旧約聖書の最初の五書は、本来は「ひとつの書」として書かれたものである。

②著者はモーセである。

＊カナンの地に入国する前のイスラエル人のために書いた。

＊彼らは、イスラエルの歴史や出エジプトの歴史を知らない世代である。

＊何のためにカナンの地で生きるのかを知らなければならない。

（2）文脈の確認

①創世記は、人類の罪と、その罪に対する裁きについて教えている。

②出エジプト記は、エジプトの束縛からの贖いの書である。

③レビ記は、聖い神との交わりを維持する方法を教えている。

④民数記は、約束の地への旅を描いた歴史書であるが、それ以上の意味を持つ。

（3）民数記という名称

①ヘブル語聖書「ヴァ・ミッドバル」（in the wilderness）

②七十人訳「アリスモイ」（数字、人口）

③2 つの大規模な人口調査が記録されている。

＊1～4 章（古い世代の人口調査）

＊26～27 章（新しい世代の人口調査）

④世代交代の書でもある。

（4）民数記の特徴

①エジプトを出て約束の地に向かう旅は、クリスチャンライフの象徴である。

②新約聖書は、民数記の中の霊的教訓をクリスチャンライフに適用している。

③アウトラインとしては、「旅の行程を追いかける方法」と「世代交代に目を留める方法」があるが、今回は後者を採用する。

2. アウトライン

（1）古い世代の崩壊（1～20 章）

①人口調査（1～4 章）

②律法の追加（5～10 章）

③民の不満（11～12 章）

④民の不信仰（13～20 章）

（2）新しい世代の出現（21～36 章）
①荒野の旅（21～25 章）
②人口調査（26～27 章）
③捧げ物の規定（28～30 章）
④土地の配分（31～36 章）

3. 結論
（1）民数記の要約
（2）私たちへの教訓

民数記を通して、クリスチャンライフの本質について学ぶ。

Ⅰ．古い世代の崩壊（1～20 章）

1. 人口調査（1～4 章）
（1）エジプトを出て 2 年目の第 2 月の 1 日
①出 40：2、17 から、幕屋が建てられてからひと月後であることが分かる。
②人口調査をせよという【主】からの命令があった。
＊20 歳以上の軍務につくことのできる者たち

（2）人口調査の結果
①登録された者の総合計は、603,550 人。
②全部族が、エジプトでの寄留生活の間に、爆発的な人口増加を経験した。
③レビ人の人口調査は、幕屋で奉仕をするための人員の調査である。

2. 律法の追加（5～10 章）
（1）モーセの律法は 613 ある。
①出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の 4 つの書に収められている。

（2）重要な記録
①ナジル人の誓願（6：1～21）
②大祭司の祝福の祈り（6：22～27）
③シャカイナグローリーの現れ（9：15～23）
④シナイの荒野からの旅立ち（10：11～28）

3. 民の不満（11～12 章）
（1）【主】に対する反抗
①タブエラでのつぶやき（11：1～3）

＊水と食物の不足、悪環境などと思われる。

＊タブエラとは、「（神の怒りの炎を）燃え上がらせた」という意味。

②キブロテ・ハタアワでのつぶやき（11：4～9）

＊混じってきていた者から起こった。

＊マナを軽視し、奴隷時代を美化した。

＊ただで魚、きゅうり、すいか、にら、たまねぎ、にんにくを食べていた。

＊神の裁き：うずらの供給と、疫病による死。

(2) ミリアムとアロンの反抗

①モーセの権威に挑戦した。

②モーセは、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。

③主犯のミリアムの皮膚は、雪のように白くなった。

④モーセは、ミリアムとアロンのために執りなしの祈りを捧げた。

4. 民の不信仰（13～20 章）

(1) カデシュ・バルネアにて

①斥候が 12 人派遣された。

②12 部族から 1 人ずつ派遣（レビ族を除外し、ヨセフ族からは 2 人）。

③注目すべき 2 人

＊ユダ族の斥候エフネの子カレブ

＊エフライム族の斥候ヌンの子ヨシュア

(2) 偵察隊の報告

①40 日後、偵察隊が帰還し、調査結果を報告した。

②その地は、「乳と蜜の流れる」非常に良い地である。

③しかし、その地の民は強い。

④不信仰は、容易に集団全体に悪影響を及ぼす。

(3) カレブとヨシュアの信仰

①「ぜひとも、上って行って、そこを占領しよう。必ずそれができるから」

②「カデシュ・バルネア」とは、「聖なる地」という意味である。

(4) 反逆の民

①絶望した民は、新しい指導者を立てて、エジプトに帰ることを提案した。

②神による裁きの宣言

③モーセの執りなしの祈り

＊モーセは、神と民の間に立つ仲介者としての役割を果たす。
＊彼は、他の民族が神の御名をあざ笑うだろうと神に訴えた。
＊彼は、【主】の恵みに訴えかけた。
④モーセの仲介者としての姿は、主イエスの姿を思い出させる。

(5) 不信仰の結果
①人口調査で 20 歳以上に登録された者たち全員が、荒野で死ぬようになる。
②エフネの子カレブとヌンの子ヨシュアだけが約束の地に入ることができる。
③さらに、20 歳以下の子供たちも、そこに入るようになる。
④40 年間の放浪は、斥候が約束の地を行き巡った 40 日から来ている。

(6) 荒野の 38 年間の記録は少ない。
①コラ、ダタン、アビラムの反逆
②ミリアムの死
③モーセの罪（20：2～13）
＊岩に命じる代わりに、その岩を杖で 2 度打った（メリバの水事件）。
＊これは、不信仰の行為である。
＊水は出たが、モーセは、民を約束の地に導くという特権を奪われた。
＊民を約束の地に導く指導者は、【主】であることが明らかになった。
④エドムの迂回（イスラエルの通行を許可しなかった）
⑤アロンの死

Ⅱ．新しい世代の出現（21～36 章）

1．荒野の旅（21～25 章）

(1) 青銅の蛇
①マナを侮辱した民が、毒蛇にかまれる。
②青銅の蛇を旗ざおの先に上げた。
③それを見上げた者は、癒された。
④青銅の蛇は、キリストの予表である。
「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです」（ヨハ 3：14～15）

(2) エモリ人の王シホンとバシャンの王オグに対する勝利
①新世代のイスラエル人にとっては、出エジプトに匹敵するほどのもの。

②戦いに勝利したイスラエルの民の前には、「カナンの地」が広がっていた。

(3) モアブの王バラクと占い師バラム

①イスラエルは、約束の地の対岸、モアブの草原に到着し、そこに宿営した。

②バラクは、イスラエルの民を恐れた。

③バラムは、呪いではなく祝福を語った。

＊神はイスラエルを呪うどころか、祝福しておられる。

＊イスラエルは地上のどの民とも異なっている。

＊彼らは、諸国民の中から選び出された民である。

＊その数は増加し、「ちりの群れ」のように数えられないほどになる。

(4) 民は、モアブ人の誘惑に屈し、バアル礼拝に引き込まれてしまう。

①ピネハス（アロンの孫）の義憤

②2 万 4 千人が神罰で死ぬ。

2. 人口調査（26～27 章）

(1) 38 年前の人口調査との比較

①前回は 603,550 人、今回は 601,730 人。1,820 人の減少。

②兵士数が最も多いのは、今回もユダ部族。カナン定住後、重要な意味を持つ。

(2) エジプトでは爆発的な人口増加があったが、荒野の 40 年間では人口が減少。

①元をただせば、カデシュ・バルネアでの不信仰（13 章）が原因である。

(3) モーセの死の予告と、ヨシュアの任命

①モーセは、ネボ山から約束の地を見ることが許された。

②しかし、モーセがその地に入ることは許可されなかった。

③主が次世代の指導者として任命されたのは、ヌンの子ヨシュアである。

④モーセは、主が命じたとおりに、任命式を執り行った。

3. 捧げ物の規定（28～30 章）

(1) 約束の地を前にした新しい世代に、捧げ物について再度指示が出される。

①捧げる回数の多い順に出てくる。

②毎日の捧げ物、安息日ごとの捧げ物、新月の捧げ物、毎年の祭りの捧げ物

③捧げ物の量は、後に行くほど多くなり、仮庵の祭りで、最高潮に達する。

4. 土地の配分（31～36 章）

（1）ヨルダン川の東側が制圧された。

①ルベン部族とガド部族は非常に多くの家畜を持っていた。

②彼らは、東側を相続地にしたいと願い出た。

③カナンの地の戦いに参戦することを条件に、それが許可された。

④マナセ族は半分がヨルダン川の東に、残りの半分が西に所有地を得た。

（2）旅程の回顧

結論

1. 民数記の要約

（1）民数記は、シナイ山からモアブの草原に至るまでの旅程を描いている。

（2）この旅は、【主】に対する信頼と従順が要求される旅である。

（3）もし【主】に従うなら、数週間で終わる旅である。

（4）しかし、民は不信仰のゆえに、40 年間、荒野をさまようことになった。

（5）その結果、古い世代の者は死に絶えた。

（6）モアブの草原に来たイスラエルの民は、数名の古い世代のリーダーとともに約束の地の征服に向かおうとしている。ここには、新しい希望がある。

（7）彼らは、勝利を確信してヨルダン川を渡って行く。

（8）【主】が「この地はあなたがたに与える」（10：29）と約束しておられる。

2. 私たちへの教訓

（1）新約聖書は、民数記から霊的教訓を導き出している。

①1 コリ 10：1～15

②ヘブ 3～4 章

（2）ヘブ 4：11

「ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもいないようにしようではありませんか」

①この聖句は、民数記に言及したものである。

②イスラエルの民は、不従順によって神の恵みから落後してしまった。

③これは、新約時代に生きる私たちへの警告である。

（3）多くのクリスチャンは、霊的に荒野をさまよっている。

①小羊の血によってエジプトから解放された。

＊信仰によって罪の赦しを得た。

②しかし、キリストにある信者に約束されている霊的祝福に入っていない。
「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました」（エペ 1：3）

＊救われてはいるが、その先に進んでいない状態にある。

＊人口は、1,820 人減少した。

＊この祝福は、信仰によって受け取るものである。

③霊的放浪の原因は、カデシュ・バルネアでの不信仰にある。

④信仰によって進む者は、ヨルダン川を渡らねばならない。

＊これは、自我を十字架につけることである。

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」（ガラ 2：20）

60 分でわかる旧約聖書（5）「申命記」

1. はじめに

(1) 創世記、出エジプト記、レビ記、民数記に続いて申命記を取り上げる。

①旧約聖書の最初の五書は、本来は「ひとつの書」として書かれたものである。

②著者はモーセである。

＊カナンの地に入国する前のイスラエル人のために書いた。

＊彼らは、イスラエルの歴史や出エジプトの歴史を知らない世代である。

＊何のためにカナンの地で生きるのかを知らなければならない。

(2) 文脈の確認

①創世記は、人類の罪と、その罪に対する裁きについて教えている。

②出エジプト記は、エジプトの束縛からの贖いの書である。

③レビ記は、聖い神との交わりを維持する方法を教えている。

④民数記は、約束の地への旅を描いた歴史書であり、世代交代の書である。

⑤申命記は、新しい世代に対する律法の解説書である。

(3) 申命記という名称

①ヘブル語の書名は「エレー・ハデバリム」である。

＊この書の最初の 3 語が、タイトルになっている。

＊英語で「These are the words」という意味である。

②英語では、「Deuteronomy」と言う。

＊七十人訳聖書の「Deuteronomion」（第 2 の律法）から出たもの。

＊七十人訳は、申 17：18 の言葉を誤訳した。

＊「律法の写し」が、「Deuteronomion」（第 2 の律法）と訳された。

＊ラテン語訳は、「Deuteronomium」である。

③日本語の書名「申命記」は、漢語訳聖書からの借用である。

＊「申命」とは「繰り返して命じる」という意味である。

＊漢語訳の書名にも、「第 2 の律法」という誤解が反映されている。

＊申命記は、それまでに啓示されていた律法の解説書である。

(4) 著者はモーセである。

①申 31～34 章は、モーセが書いたのではない。恐らくヨシュアであろう。

②これを根拠に、モーセが著者であることを否定すべきではない。

③この部分は、本来はヨシュア記に属するものである。

2. アウトライン
   （1）過去の回顧（1～4 章）
   （2）律法の解説（5～26 章）
   （3）未来の展望（27～30 章）
   （4）指導者の交代（31～34 章）

3. 結論
   （1）律法の本質
   （2）イスラエルの将来
   （3）申命記とイエスの教え

申命記を通して、イエスの教えの意味を考える。

Ⅰ．過去の回顧（1～4 章）

1. イントロダクション（1：1～4）

（1）話者、聞き手、場所（1：1）

「これは、モーセがヨルダンの向こうの地、パランと、トフェル、ラバン、ハツェロテ、ディ・ザハブとの間の、スフの前にあるアラバの荒野で、イスラエルのすべての民に告げたことばである」（1 節）

①語り手はモーセである。

＊主イエスが登場するまでは、彼に匹敵する預言者はなかった。

＊彼は、神の言葉を代弁するにふさわしい人物だった。

②聞き手は、イスラエルの民である。

＊38 年の放浪生活で、成人した民である。

＊彼らは、ひと月後には約束の地に入ろうとしている。

③場所は、荒野である。

＊ヨルダンとアラバは分かるが、他の地名に関しては分からない。

④律法を解説するために、神の恵みの業を振り返っている。

（2）時の特定（1：2～４）

「ホレブから、セイル山を経てカデシュ・バルネアに至るのには十一日かかる。第四十年の第十一月の一日にモーセは、【主】がイスラエル人のために彼に命じられたことを、ことごとく彼らに告げた。モーセが、ヘシュボンに住んでいたエモリ人の王シホン、およびアシュタロテに住んでいたバシャンの王オグをエデレイで打ち破って後のことである」（2～4 節）

①神の啓示を、歴史の中に位置づける。

②11 日と 40 年の対比は、不従順が悲劇的な結果をもたらしたことを示す。

③11 日とは、ホレブからカデシュ・バルネア（約束の地の入り口）まで移動するために要する日数である（距離は約 240 キロ）。
④この対比は、新世代の民に、同じ過ちを繰り返すなと教えるためのもの。
⑤残念ながら、民がこの警告に完全に耳を傾けることはなかった。
⑥2 人の王（シホンとオグ）に対する勝利との関係で、時が特定されている。

2. ホレブからベテ・ペオルまでの出来事の回顧（1：5～3：29）

(1) 約束の地に入るための最初の試み（1：5～46）

①ホレブからの旅立ち。【主】は、ホレブを発って約束の地に行けと命じた。
②この地は、【主】が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓ったものである。
③民の組織化がなされた。
　＊千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長の任命
④ホレブからカデシュ・バルネアまでは、約 240 キロの旅になる。
⑤神は、荒野の旅の間、父親が子どもを守るように民を守られた。
⑥約束の地の入り口に来て、12 人のスパイが送られた。
　＊10 人のスパイは、否定的な情報をもたらした。
　＊カレブとヨシュアは信仰の言葉を語った。
　＊彼らは、約束の地に入れることになった。

(2) 新しい始まり：ヨルダン川東岸を北上する旅（2：1～25）

①38 年の荒野の放浪生活の後、【主】からの語りかけがある。
②【主】は、イスラエルの民にカナンの地を与えるという約束を守られる。
③エドム（エサウの子孫）と戦ってはならない。
④モアブとアモン（ロトの子孫）と戦ってはならない。

(3) ヨルダン川東岸の征服（2：26～3：29）

①ヘシュボンの王シホンに勝利する。
②バシャンの王オグに勝利する。
③ヨルダン川東岸の地の分割
　＊ルベン族、ガド族、マナセの半部族
④2 部族半への進軍命令
⑤モーセは約束の地への入国を神に願うが、拒否される。
⑥この時、民はベテ・ペオルの近くの谷にとどまっていた。

3. 律法に従い、偶像礼拝を排除せよとの勧告（4：1～49）

(1) バアル・ペオルでの失敗（4：1～8）

①モアブ人の誘惑により、霊的、肉体的姦淫の罪を犯した。
②24,000 人が疫病で死んだ。
③律法に従うことが、祝された生活の鍵である。

（2）ホレブでの経験（4：9～14）
①【主】はイスラエルの民と契約を結ばれた。
②二枚の板に書かれた十戒が与えられた。
③これは、約束の地で実行するためのものである。
④この体験を、子孫に伝える必要がある。

（3）偶像礼拝の禁止（4：15～40）
①【主】は目に見えないお方である。
②何かの形に刻んだ像を造ってはならない。
③天の万象を拝んではならない。
④偶像礼拝に陥るなら、約束の地から追い出される。
＊これは、警告であり、預言でもある。
⑤【主】だけが神である。

（4）その他の事項（4：41～49）
①ヨルダン川の東岸に置かれた 3 つの逃れの町
②律法の解説を行うための地理的情報の説明

Ⅱ．律法の解説（5～26 章）

1．十戒の解説（5 章）
①再記述の法則
②神は十戒の作者であり、モーセは仲介者である。

2．主要な命令と警告（6～11 章）
「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（6：4～5）

3．その他の諸規定（12～26 章）

Ⅲ．未来の展望（27～30 章）

1. 祝福と呪い（27～28 章）
2. 土地の契約（29～30 章）

（1）申 29：1

「これは、モアブの地で、【主】がモーセに命じて、イスラエル人と結ばせた契約のことばである。ホレブで彼らと結ばれた契約とは別である」

①「ホレブで彼らと結ばれた契約」とは、モーセ契約のことである。

②この契約は、モーセ契約とは別に結ばれた契約である。

③この契約は、無条件契約である。

（2）土地の契約の条項

①イスラエルの不信仰と世界への離散が預言されている（申 29：2～30：1）。

②イスラエルは、悔い改める（申 30：2）。

③メシアが戻って来られる（申 30：3）。

④イスラエルは、再び集められる（申 30：3～4）。

⑤イスラエルは、約束の地を所有する（申 30：5）。

⑥イスラエルは、霊的に生まれ変わった状態で生きる（申 30：6）。

⑦イスラエルは、「メシア時代」の祝福を受ける（申 30：8～10）。

（3）土地の契約の意義

①約束の地の所有権はイスラエルにあることが再確認された。

②イスラエルが罪を犯しても、土地の権利が奪われることはない。

＊土地の契約は、無条件契約である。

③イスラエルが不信仰になれば、その土地から追放される。

Ⅳ．指導者の交代（31～34 章）

1. モーセによる新しいリーダーの任命（31 章）
2. モーセによる新しい歌（32 章）
3. モーセによる新しい祝福（33 章）
4. モーセの死（34 章）

結論

1. 律法の本質

（1）律法と律法主義とを混同してはならない。

（2）律法主義とは、口伝律法を強調することである。

(3) 律法は、本来良いものである。
(4) 神は最初から、律法による救いを想定しておられない。
(5) 問題は、人間の心の中にある。
(6) 人間の内側には罪があるので、神は恵みによる救いを提供された。

2. イスラエルの将来
(1) 土地の契約は、アブラハム契約の土地に関する条項が発展したものである。
(2) 土地の契約の現状
①アブラハムの子孫は土地を所有するようになるという約束が与えられた。
②しかし、不従順のためにヤコブとその子孫は 400 年間エジプトに住んだ。
③出エジプト後、彼らは約束の地の一部を所有した。
⑤その後、再び不従順に陥り、アッシリヤ捕囚、バビロン捕囚を経験した。
⑥70 年後にバビロンから帰還し、再び約束の地を奪回した。
⑦紀元 70 年にエルサレムが滅び、彼らは再び離散の民となった。
⑧しかし、イスラエルの民には、将来の帰還が約束されている。
＊イザ 11：11～12、エレ 23：3～8、エゼ 37：21～25、アモ 9：9～15
(3) 1948 年のイスラエル国家の誕生
①イスラエルの回復は、2 段階でやって来る。
②先ず、不信仰な状態での肉体的回復が起こる。
③次に、霊的回復が起こる。

3. 申命記とイエスの教え
(1) 申命記は、律法を行うことは、神の愛と恵みに対する応答だと教えている。
(2) ヨハ 14：21
「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します」
①キリストに対する愛は、その戒めを実行することによって表現される。
②その人は、父に愛される。
③キリストはその人にご自身を現される。
＊幻を見るということではない。
＊聖霊がキリストをその人に示す。
＊信者は、聖書の中でキリストに出会うのである。

60 分でわかる旧約聖書（6）「ヨシュア記」

1. はじめに

(1) モーセの五書が終わった。

①五書は本来ひとつの書として書かれた。

②申命記は、新しい世代に対する律法の解説書である。

③申命記の最後で、モーセからヨシュアにリーダーシップが移行した。

(2) ヨシュア記は、歴史書の最初の書である。

①ユダヤ人の区分によれば、「前期預言者」の最初の書である。

②出エジプト記は、イスラエルの民をエジプトから導き出す物語である。

③ヨシュア記は、イスラエルの民を約束の地に導き入れる物語である。

(3) 著者は、ヨシュアである。

①タルムードによれば、最後の 5 節以外すべてヨシュアが書いたとされる。

＊最後の 5 節は、大祭司エレアザルの息子ピネハスが書いた。

②この書には、生き生きとした歴史的記述が満ちている。

＊目撃者の筆によるものであろう。

＊「私」「私たち」という言葉が出て来る。

＊ヨシュアが著者であるという説は、十分信じられる。

(4) ヨシュアの経歴 10 のポイント

①出エジプトの時、およそ 40 歳であった。

②モーセは彼の名をホセアからヨシュアに変えた（民 13：16）。

＊ホセアは「救い」、ヨシュアは「【主】は救い」という意味。

③エフライム族（民 13：8）

④モーセの従者（ヨシ 1：1）

⑤最初の戦い（アマレクとの戦い）の指揮を取った（出 17 章）。

⑥モーセから霊的訓練を受けた。

「【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔とを合わせてモーセに語られた。モーセが宿営に帰ると、彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が幕屋を離れないでいた」（出 33：11）

⑦モーセとともにシナイ山に上った（出 32：17）。

⑧12 人のスパイの内、彼とカレブだけがよい報告をした（民 14：6～10）。

⑨モーセの後継者となったのは、およそ 80 歳の時である。

⑩110 歳でその生涯を終えた（ヨシ 24：29）。

2. アウトライン
   (1) カナンの地への侵入（1：1～5：12）
   (2) カナンの地の征服（5：13～12：24）
   (3) カナンの地の分割（13～21 章）
   (4) まとめ（22～24 章）

3. 結論
   (1) イエスの型
   (2) クリスチャン生活の型

ヨシュア記を通して、勝利あるクリスチャン生活の秘訣について考える。

Ⅰ．カナンの地への侵入（1：1～5：12）

1. ヨシュアの任命（1 章）

(1) 人は死ぬが、神の計画は成就に向かって進む。
①モーセは、生まれつきのリーダーである。
②ヨシュアは、平凡な人である。
③彼は、軍事的才能ではなく、霊的資質のゆえにモーセの後継者となった。

(2) 神からヨシュアへのことば
①約束の地は、アブラハム契約のゆえにイスラエルの民に与えている。
②「わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう」
③それゆえ、すべての律法を守り行え。

(3) 民は、ヨシュアに従うことを約束した。

2. スパイの派遣（2 章）

(1) エリコを偵察するために、2 人のスパイが派遣された。
①ラビ的伝承によれば、カレブとピネハスがそれである。
②神の約束と人間の責務のバランスがここに見える。

(2) ラハブが 2 人のスパイをかくまった。
①ラハブは、イスラエルの神を真の神として恐れ、信じた。
②ラハブは、エリコの町が陥落することを信仰によって確信した。
③その時、自分の家族が助けられることを願った。

（3）2 人のスパイは、ラハブとその家族を救うことを誓った。
①赤いひもを窓に結びつけるように命じた。
②このラハブは、キリストの系図に名を連ねる 4 人の女性のひとりとなった。

3. ヨルダン渡河（3～4 章）

（1）イスラエルの民は、ヨルダン川を渡った。
①契約の箱が先頭を進んだ。
②契約の箱をかつぐ祭司たちの足が川に入った時に、水がせき止められた。

（2）これは、紅海が 2 つに割れたのと同じ種類の奇跡である。
①紅海の奇跡では、民は【主】がモーセを任命されたことを知った。
②ヨルダン川の奇跡では、【主】がヨシュアを任命されたことが証明された。
③民は、モーセを恐れたように、ヨシュアを恐れた。

（3）ギルガルに記念の石が立てられた。
①ヨルダン川から取って来た 12 の石が立てられた。
②ヨルダン川の渇いた土の上を渡ったことを記念するためである。

4. イスラエルの民の聖別（5：1～12）

（1）イスラエルの民に割礼を施した。
①出エジプトの世代は割礼を受けていたが、彼らは荒野で死んだ。
②荒野で誕生した世代は、だれも割礼を受けていなかった。
③土地の約束は、アブラハム契約の条項のひとつである。
④割礼は、アブラハム契約のしるしである。

（2）過越のいけにえを捧げた。
①これは、エジプトを出てから 3 度目の過越の祭りである。

（3）その翌日、彼らはその地の産物を食べた。
①マナの降ることが止んだ。
②これは、彼らが約束の地に入ったことを証明している。

Ⅱ．カナンの地の征服（5：13～12：24）

1. はじめに：【主】の軍の将（5：13～15）

「さて、ヨシュアがエリコの近くにいたとき、彼が目を上げて見ると、見よ、ひとりの

人が抜き身の剣を手に持って、彼の前方に立っていた。ヨシュアはその人のところへ行って、言った。『あなたは、私たちの味方ですか。それとも私たちの敵なのですか。』すると彼は言った。『いや、わたしは【主】の軍の将として、今、来たのだ。』そこで、ヨシュアは顔を地につけて伏し拝み、彼に言った。『わが主は、何をそのしもべに告げられるのですか。』すると、【主】の軍の将はヨシュアに言った。『あなたの足のはきものを脱げ。あなたの立っている場所は聖なる所である。』そこで、ヨシュアはそのようにした」（ヨシ 5：13～15）

（1）戦いを前にしたヨシュアの苦悩

①エリコの城壁を前に、戦略を考えている。

（2）ある人物との出会い

①抜き身の剣を手に持って、彼の前方に立っている。

②ヨシュアは、「味方か敵か」と問うた。

＊味方なら、イスラエル人である。

＊敵なら、すぐに戦う用意がある。

③「いや、わたしは【主】の軍の将として、今、来たのだ」との回答があった。

（3）この人物が神であるとの認識

①「わが主は、何をそのしもべに告げられるのですか」

＊ヨシュアは、アブラハムやモーセと同じように子なる神に出会った。

＊この人物は、受肉前のイエス・キリストである。

②「あなたの足のはきものを脱げ。あなたの立っている場所は聖なる所である」

＊この人物は、罪に汚れたカナンの地のその部分を聖なる所とした。

（4）この体験がもたらした祝福

①ヨシュアは、この戦いはイスラエル人とカナン人の戦争だと思っていた。

＊実際は、この戦いは「主の戦い」であった。

②神は、この戦いを天から眺めていると思っていた。

＊実際は、神がこの戦いの先頭に立っておられた。

③この経験は、ヨシュアに力と確信と平安を与えた。

＊これは、すべてのリーダーが通過しなければならない経験である。

2．中央部の征服（6～8 章）

（1）エリコの征服（6 章）

①兵士―角笛を持つ 7 人の祭司たち―契約の箱―兵士―その他の民

②最初の 6 日間は町の回りを 1 度、7 日目は 7 度回る。

③祭司たちは角笛を長く吹き鳴らす。
④それを聞いた民は、大声で鬨の声上げる。
⑤すると城壁が崩れた。

(2) アイでの敗北（7 章）
①「聖絶」（ヘレム）
＊神のために完全に分離するという意味
＊罪や汚れがある場合は、それが裁きのための分離となる。
②カナン征服戦争は、カナン人を裁くための「聖戦」である。
＊「聖戦」とは政治的概念ではなく、宗教的概念である。
＊イスラエルの民は、裁きをもたらす神の器として用いられた。
③しかし、アカンは聖絶のもののいくつかを取った。
④そのため、アイの戦いで負けた。
⑤アカンとその家族は処刑された。

(3) アイでの勝利（8 章）

3. 南部征服（9～10 章）
(1) ギブオン人との同盟（9 章）
①ギブオン人は、遠方から来たと偽り、イスラエル人と盟約を結んだ。
②それが偽りだと判明しても、イスラエル人は言葉の重みを守った。

(2) 5 人の王たちとの戦い（10 章）
①エルサレムの王アドニ・ツェデクが南部の 4 人の王たちに呼びかけ、ギブオンを攻めた。
②ヨシュアは、ギルガルからギブオンに急行し、敵を打ち破った。
③太陽と月がまる 1 日動かなかったのは、この時である。
④「主がこの日のように人の訴えを聞き届けられたことは、後にも先にもなかった。主はイスラエルのために戦われたのである」（10：14）

4. 北部征服（11 章）
(1) 北部連合軍に対する勝利

5. 戦いの総括（11：6～12：24）
(1) 征服した領地の範囲
(2) 征服した王たちの名前

Ⅲ．カナンの地の分割（13～21 章）

1．2 部族とマナセの半部族（13 章）

2．カレブ（14 章）

3．9 部族とマナセの半部族（15：1～19：48）

4．ヨシュア、レビ族（19：49～21：45）

（1）ヨシュアは、エフライムの山地にあるティムナ・セラフを得た。

①彼は、最後にそれを得た。

②つつましい村である。

（2）レビ族には、48 の村が与えられた。

①その内の 6 つは逃れの町である。

Ⅳ．まとめ（22～24 章）

結論

1．イエスの型

（1）モーセは、律法の代表である。

①モーセは、彼が犯した罪のゆえに約束の地に入れなかった。

②彼は、イスラエルの民を約束の地に導き入れることはできなかった。

③これは、律法による救いは不可能であることを示している。

（2）ヨシュアは、イエスの型である。

①ヨシュアは「イェシュア」と同じ名前である。

②「【主】は救い」という意味である。

③ヨシュアは、イスラエルの民を約束の地に導き入れた。

④これは、信仰と恵みによって人は救われることを示している。

（3）ヨシュアは、ごく普通の人がリーダーになれることを示している。

①神にとっては、彼は用いやすい器であった。

②忠実さこそ、彼の特徴である。
③彼は、アブラハム契約の内容を熟知していた。
④人間の側の不真実にもかかわらず、神の約束は成就することを知っていた。

2. クリスチャン生活の型

（1）約束の地は天国の型ではなく、クリスチャン生活の型である。

①神は、アブラハム契約によってこの地をイスラエルの民に与えた。
＊これは、無条件契約である。
＊約束の地の所有権は、イスラエルの民に属するものである。

②しかし、イスラエルの民は戦いによってこれを征服する必要があった。
＊約束の地の占有は、条件付きであった。

（2）クリスチャンには、すでに祝福が保証されている。

「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました」（エペ 1：3）

（3）しかし、その祝福を体験するための地上的戦いがある。

「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです」（ピリ 1:6）

60 分でわかる旧約聖書（7）「士師記」

1. はじめに

（1）著者

①王政に入って以降に、書かれた書である。

②著者が誰かは分からない。

③サムエルである可能性が高い。

（2）名称

①士師記という名称は、この書に登場する士師たちから取られたものである。

②士師は「ショフェット」である。英語では「judge」「deliverer」である。

③彼らは裁判官であり、また政治的・軍事的指導者、敵からイスラエル人を解放する解放者、救済者でもあった。

④士師記には、12 人の士師たちが登場する。

⑤それぞれの士師に関する記録の長さは異なる。短いものは 1 節である。

（3）内容

①ヨシュアが死んで以降のイスラエルの民の歴史を取り上げている。

②ヨシュアの指導のもと、土地が各部族に分割された。

③イスラエルの民は、大いなる期待を持って約束の地に入った。

＊勝利ある生活

＊豊かな生活

＊ヤハウェの栄光を反映させた生活

④しかし、各部族は異教の民を完全に追放することができなかった。

＊それが問題の根本原因となった。

＊イスラエルの民は、しばしば異教の民に征服された。

＊神は、その都度「士師」と呼ばれる指導者を立て、民を解放した。

⑤士師記は、「敗北と解放の書」である。

⑥また、「失望の書」でもある。

（4）士師たちの活動期間

①オテニエルからサムソンまで、約 325 年間

②各士師の活動期間を合計すると、400 年以上になる。

③士師たちの記録は、年代順ではない。

④活動が同時進行した士師たちがいる。

⑤彼らの活動は、モーセやヨシュアと異なり地域限定型であった。

2. アウトライン
   (1) 過去と未来（1：1～3：6）
      ①過去（1：1～2：10）
      ②未来（2：11～3：6）
   (2) 士師たちの時代（3：7～16：31）
   (3) 民の崩壊（17～21 章）

3. 結論
   (1) 歴史の法則
   (2) クリスチャン生活の法則

補足：12 人の士師たち

1. オテニエル（3：1～11）：11 節
2. エフデ（3：12～30）：22 節
3. シャムガル（3：31）：1 節
4. デボラ（4～5 章）：2 章
5. ギデオン（6：1～8：32）：3 章
6. トラ（10：1～2）：2 節
7. ヤイル（10：3～5）：3 節
8. エフタ（10：6～12：7）：2 章
9. イブツァン（12：8～10）：3 節
10. エロン（12：11～12）：2 節
11. アブドン（12：13～15）：3 節
12. サムソン（13～16 章）：4 章

士師記を通して、歴史の法則について考える。

Ⅰ．過去と未来（1：1～3：6）

1. 過去（1：1～2：10）

(1) ヨシュアが死んで以降の各部族の戦い
①各部族は、自分の割り当て地において先住民を追放する戦いを展開する。
②この戦いは、イスラエルの民にとっては定住地を獲得するための戦い。
③先住民にとっては、主の裁きを受ける戦い。

(2) ユダ族の戦い
①シメオン族との協力

②エルサレムは、エブス人が住み続ける。
③ベニヤミン族との協力

(3) 北の部族による征服
①中途半端な戦いしかできなかった。
②カナン人を完全に追い払うことができなかった。
③カナン人が点在していたため、部族間の移動の自由がなくなった。
④カナン人の偶像礼拝はそのまま残された。
⑤イスラエル人はその影響を受け、背教の民となっていく。
⑥カナン人と関係を結ぶようになり、契約の民としての特徴を失っていった。
⑦神は、カナン人の存在を、イスラエル人の信仰を試すものとして利用された。
⑧民が不信仰に陥った時には、神はカナン人を裁きの器として用いた。
⑨悔い改めた時には、カナン人の手から救い出した。
⑩第 3 世代の者たちには、戦争の経験がなかった。
⑪戦争の経験は、王制に移行するためにどうしても必要なものであった。

(4) 第 2 世代から第 3 世代へ
①ヨシュアの死後も、【主】の奇跡を目撃した長老たちがいた（第 2 世代）。
②これらの長老たちが生きている間は、民は【主】に忠実に歩んだ。
③第 3 世代になると、民は自分勝手な歩みをするようになった。
④第 3 世代がどのように歩んでいたかが、士師記の時代背景となっている。

2. 未来（2：11～3：6）

(1) 士師時代にくり返されるあるパターンが紹介されている。
①背信の段階
＊イスラエル人はバアル礼拝に取り込まれていく。
②裁きの段階
＊隣国の人々を用いて、【主】がご自身の民を裁かれる。
③悔い改めの段階
＊イスラエルの民は苦難の中から【主】に助けを呼び求める。
④士師による解放の段階
＊民の叫びを聞いた【主】は、士師を送り、敵の手から民を救う。

Ⅱ．士師たちの時代（3：7～16：31）

1. オテニエル（3：1～11）：11 節

（1）カレブの弟である。
（2）敵は、アラム・ナハライムのクシャン・リシュアタイム。

2. エフデ（3：12～30）：22 節
（1）左利きの士師
（2）敵は、モアブの王エグロン。

3. シャムガル（3：31）：1 節
（1）「牛の突き棒」を使って戦った士師
（2）敵は、ペリシテ人。

4. デボラ（4～5 章）：2 章
（1）12 人の士師の中で唯一の女性。
①彼女は女預言者と呼ばれている。
②実戦の指導者としてバラクを立てたが、バラクはあくまでも援助者。

（2）敵は、ハツォルの王ヤビン。
①鉄の戦車 900 両がキション川のほとりで動けなくなった。
②【主】が大雨を降らせた。

5. ギデオン（6：1～8：32）：3 章
（1）マナセ族の中で最も弱い分団に属していた。
①酒ぶねの中で小麦を打っていたときに、【主】の使いが現れた。
②神の御心を確認するために、しるしを求めた。
③羊の毛の上に霜が降り、土全体は渇くように。
④次は、その逆を求めた。

（2）敵は、ミデヤン人。
①3 万 2 千人の兵士を 300 人に減らした。
②水の飲み方で、300 人を選抜した。

6. トラ（10：1～2）：2 節
（1）平和と繁栄の時代の士師である。45 年間。
（2）アビメレク（ギデオンの息子）の時代に起こった混乱を静めた。

7. ヤイル（10：3～5）：3 節

（1）トラと同時代の平和と繁栄の時代の士師である。45 年間。
（2）ヨルダン川東岸からの士師である。

8. エフタ（10：6～12：7）：2 章

（1）ギルアデ人の父と遊女の母の間に生まれた。
①正妻の息子たちから差別を受け、ギルアデから追い出された。
②彼の回りにはごろつきどもが集まるようになった。
③彼らは、敵の領土に侵入し、食物や必需品などを略奪するようになった。
④これが彼らに戦闘の経験を与えた。

（2）敵は、アモン人。
①最初に出て来る者を「全焼のいけにえ」として捧げるとの請願を立てた。
②最初に踊りながら出て来たのは、彼のひとり娘であった。
③モーセの律法によれば、これは正式な請願ではないので、取り消すことができた。
④それをしなかったのは、無知であったか、頑なであったかのどちらか。
⑤娘は死んだのか。2 つの意見がある。
＊文字どおり「全焼のいけにえ」として殺された。
＊終生幕屋で仕えるために【主】に捧げられた。

9. イブツァン（12：8～10）：3 節

（1）ゼブルン族のベツレヘム出身。
①一夫多妻制を実行し、30 人の息子と 30 人の娘をもうけた。

（2）「平和と繁栄の時代」の士師

10. エロン（12：11～12）：2 節

（1）ゼブルン人
（2）「平和と繁栄の時代」の士師

11. アブドン（12：13～15）：3 節

（1）エフライム人
①40 人の息子と 30 人の孫がいました。

（2）「平和と繁栄の時代」の士師
①「70 頭のろばに乗っていた」とある。

12. サムソン（13～16 章）：4 章

（1）ダン族に属するマノアの無名の妻（不妊）が母である。

①【主】の使いによって、胎内にいる時からナジル人であると宣言された。

②ナジル人とは、「聖別された者」。

（2）敵はペリシテ人

①髪の毛を剃られたとき、彼は力を失った。

②最後に彼は、約 3,000 人のペリシテ人を殺した。

Ⅲ. イスラエルの民の崩壊（17～21 章）

1. 士師 17：6

「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた」

2. 崩壊の過程

（1）偶像礼拝（17～18 章）

（2）不道徳（19 章）

（3）内戦（20～21 章）

結論

1. 歴史の法則

（1）妥協　→　交流　→　偶像礼拝　→　神の裁き

（2）士師時代にくり返されるパターン

①背信の段階

②裁きの段階

③悔い改めの段階

④士師による解放の段階

（3）国が崩壊する過程

①霊的崩壊

②道徳的崩壊

③物理的崩壊

（4）この時代の失敗が、次の王制に移行するための準備となっている。

2. クリスチャン生活の法則

(1) 【主】は欠点のある者や弱い者を用いてくださる。

①3 番目の士師シャムガルの例

②彼は、ペリシテ人 600 人を打ち殺して、イスラエルを救った。

③「牛の突き棒」を使って戦った。それ以外に武器がなかった。

④発掘された突き棒は、長さが約 2.4 メートルで、先端が周囲約 15 センチあり、細いほうの先端には、先のとがった鉄製の頭がついていた。

⑤このような粗末な棒で大勝利を収めたとは、驚くべきことである。

⑥ここに、主の戦いに勝利する秘訣がある。

(2) 勝利する力は、聖霊から来る。

①12 番目の士師サムソンの例

②サムソンは、胎内にいる時から、神へのナジル人であった。聖別された者。

③酒を飲まない、汚れた物を食べない、頭にかみそりを当てない。

④サムソンはイエス・キリストの型である。

＊その出産が、通常のものとは違っていた。

＊サムソンは「太陽の子」という名を与えられた。

＊サムソンは主の祝福を受けて成長した。

＊サムソンは聖霊の力によって活動を開始した。

⑤新約聖書では、バプテスマのヨハネが終生のナジル人である。

⑥霊的には、私たちクリスチャンもまたナジル人である。

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」（ヨハネ 15：5）

60 分でわかる旧約聖書（8）　「ルツ記」

1. はじめに
   (1) 著者
   ①著者が誰かは分からない。
   ②ユダヤ人の伝承では、サムエルである。
   ③ダビデの名前が出て来る。サムエルはダビデに油注ぎを行った。

   (2) 名称
   ①主人公ルツの名前が付いている書である。
   ②聖書には、女性の名が付けられた書が 2 つある。
   ＊ルツ記とエステル記である。
   ＊神は女性を大いにお用いになる。

   (3) 内容
   ①士師記の時代に起こった出来事が記されている。
   ②イスラエル人たちが不信仰に陥っている中で、異邦人の女が信仰に生きた。
   ③「贖い」という重要な概念が登場する。
   ④その結果、異邦人の女ルツは、メシアの家系に名を連ねることになる。

2. アウトライン
   (1) モアブへの移住（1：1～5）
   (2) ベツレヘムへの帰還（1：6～22）
   (3) ボアズの畑に行くルツ（2：1～23）
   (4) 買戻しを求めるルツ（3：1～18）
   (5) ボアズによる買戻し（4：1～12）
   (6) ダビデの家系（4：13～22）

3. 結論
   (1) ルツ記に登場する型について
   (2) 神の目に見えない手について
   (3) 信仰と不信仰の対比について

ルツ記を通して、神の計画に参加する方法について考える。

Ⅰ．モアブへの移住（1：1～5）

1．1～2節

（1）時代は、「さばきつかさが治めていたころ」（1節）、士師記の時代。

①「イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた」（士21：25）

②霊的混乱だけでなく、物質的な欠乏も襲ってきた。

（2）ユダのベツレヘムの人エリメレクは、困り果てた。

①家族を救うために、モアブの野に一時滞在する決心をした。

②彼は、妻のナオミとふたりの息子を連れて故郷を出た。

③約束の地を離れるのは危険なことである。

＊アブラハムはエジプトへ、イサクはペリシテ人の地へ、ヤコブはエジプトへ移住したことがあった。

＊いずれも飢饉がその理由であった。

＊ヤコブの場合は、神の許しがあったが、他の場合はそうではなかった。

（3）モアブについて

①ヨルダン川東岸の高原地帯である。

②モアブ人の祖先は、ロトである。

③姉が父ロトによって産んだ子がモアブ（創19：30～38）。

④妹が父ロトによって産んだのがアモン人の祖先ベン・アミである。

⑤モアブ人とイスラエル人の間には、血縁関係があった。

⑥イスラエル人には、モアブ人を罪に汚れた民族と見る傾向があった。

⑦肥沃な農業地帯で、羊やヤギの牧畜も盛んであった。

⑧出エジプトの時代、モアブ人の娘たちはイスラエル人を誘惑し、淫乱なバアル・ペオル礼拝に引きずり込んだ（民25：1～3、ホセ9：10）。

2．3～5節

（1）モアブの野に移住したエリメレク一家を悲劇が襲う。

①移住して間もないころ、夫のエリメレクが死んだ。

②10年ほどして、ふたりの息子はモアブの女を妻に迎えた。

＊オルパとルツ

③しかし、このふたりの息子もまた死んだ。

（2）モアブの地に残されたのは、ナオミと２人のモアブ人の嫁だけとなった。

Ⅱ．ベツレヘムへの帰還（1：6～22）

1．6～14 節

（1）ナオミのかすかな希望

①【主】がカナンの地を祝福し、豊かな収穫を与えてくださったと聞いた。

②彼女は、故郷ベツレヘムに帰還することを決意した。

③２人の嫁といっしょに住み慣れた地を離れて帰路についた。

（2）ナオミの別離の言葉

①ナオミは、２人の嫁を実家に帰す決断をした。

②２人の嫁にとって一番幸せなのは、再婚することである。

③ナオミの別離の言葉は、愛に満ちている。

④２人の嫁の反応も愛に溢れたものである。

⑤彼らは、愛の絆で結ばれていた。

（3）説得の結果

①オルパはモアブの地に帰って行った。

②しかし、ルツはナオミにすがり、実家に帰ろうとはしなかった。

③ナオミはいっさいの形式を排し、本物の信仰を求めた。

2．15～18 節

（1）ルツの決断

①姑ナオミへの愛、イスラエルの民への愛、イスラエルの神への愛があった。

②その決意の固さは、ナオミにそれ以上何も言わせないほどのものであった。

（2）決意の言葉

「あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です」（16 節）

①モアブ（異邦人）の女である彼女は、この信仰告白によってイスラエルの民が受ける祝福に与ることができた。

3．19～22 節

（1）ベツレヘムに帰還したナオミ

①自分のことを「ナオミ（快い）」ではなく、「マラ（苦しみ）」と呼んでほ

②自分の身に起こったことを、偶然ではなく、全能者の業と見ている。

③ベツレヘムに帰還したのは、大麦の刈り入れのころ、つまり春先である。

（2）絶望の中に見える光

①彼女は、自分が会った患難は全能者の御手によるものでだと理解している。
②ルツという嫁が与えられている。
③故郷に帰還した時期は、大麦の刈り入れのころであった。
＊その後の話の展開に有利に働いた。

Ⅲ．ボアズの畑に行くルツ（2：1～23）

1．1～3 節

（1）ルツの生き方

①前向きである。
②謙遜である。「落ち穂拾い」に行かせてほしいと、ナオミに願い出た。
③勤勉である。自分の手で働いたもので生きようとした。

（2）落ち穂拾いの規定

①レビ 19：9～10、23：22、申 24：19
②貧しい者と在留異国人のための規定。エジプトでの奴隷生活を思い出す。
③収穫に際して、畑の隅々まで刈ってはならない。
④落ち穂を拾い集めること、畑に忘れた束を取りに戻ることなども禁止。
⑤この規定は、オリーブやぶどうにも適用された。
⑥ルツとボアズの出会いは、この慣習があったことによる。

（3）舞台裏

「ルツは出かけて行って、刈る人たちのあとについて、畑で落ち穂を拾い集めたが、それは、はからずもエリメレクの一族に属するボアズの畑のうちであった」（3 節）

①神のドラマが進行していた。
②「はからずも」＝神の摂理
③ルツが行った畑は、ボアズという人の畑であった。
＊エリメレクの一族に属する人、つまり、ナオミの夫の親戚に当たる人
＊資産家で、律法をよく理解し、人格的にも優れた人物であった。

2．4～16 節

（1）リーダーの手本ボアズ

①ボアズとしもべたちの会話
「主があなたとともにおられますように」「主があなたを祝福されますように」
②ボアズは神を崇拝し、僕たちはそのボアズを敬慕している。
③落ち穂拾いをしている女に目を留め、世話係の若者に、「これはだれの娘か」

と聞いた。
④ナオミとともにモアブの野から帰って来たモアブの女であることを知る。
⑤ルツを大切に扱うように僕たちに命じた。
⑥身分や人種によって人を差別することがなかった。

(2) 愛の人ボアズ
①ボアズはルツに、パン切れを酢に浸して食べるように勧めた。
②炒り麦を取って、彼女に与えた。
③ルツはその好意をそのまま受けた。彼女の純真で従順な姿が現われている。

3. 17～23 節
(1) ルツの報告
①その日ルツは、大麦 1 エパ（23 リットル）を集めることができた。
②驚いたナオミは、その畑の所有者を祝福しようとして、その名を聞いた。
③それがボアズであることを知って、さらに驚いた。
④ボアズはナオミの近親者で、買い戻しの権利のある親戚のひとりだった。
⑤ルツは、ボアズがこれからも自分の畑に来るようにと語っていたことをナオミに告げ、ナオミは、ルツにそうするように勧めた。

(2) ルツの忠実さ
①毎年最初にやって来る収穫は大麦、次に小麦が続く。
②ルツは、その両方の収穫を経験した。
③ルツの忠実さが、さらなる祝福を産むことになる。

Ⅳ. 買戻しを求めるルツ（3：1～18）

1. 1～5 節
(1) ナオミの助言
①麦打ち場は戸外にあったため、収穫された麦が盗まれないように、雇い人か主人が寝泊りして番をする必要があった。
②ナオミは、その夜ボアズがそこで寝泊りすることを知っていた。
③ルツに、ボアズが寝込んだなら、その足元に密かに忍び込むように助言した。

(2) 買い戻しの権利
①ルツは、買い戻しの権利のことを聞いて平安を得たと思われる。
②人が子を残さずに死んだ場合、買い戻しの権利のある者がその妻を娶り、死

んだ者の名を残すようにと、命じられている（申 25：5～10）。
③ルツには、ボアズに買い戻しを要求する権利がある。
④ルツは、「私におっしゃることはみないたします」と返事をした。

2．6～18 節

（1）ルツの信仰

①この箇所に書かれていることは、不道徳なことではない。
②ルツはモーセの律法と姑の助言に従って行動している。
③ボアズも、モーセの律法に従って、ことを最善の方向に運ぼうとしている。
④「私はあなたのはしためルツです。あなたのおおいを広げて、このはしためをおおってください」
⑤「おおい」とは、衣の「裾」のこと、直訳すると「翼」である。
⑥今日でも、ユダヤ式結婚式では、この習慣が実行されている。
⑦夜中に自分がやって来た理由を、「あなたは買い戻しの権利のある親類ですから」と説明している。

（2）ボアズの信仰

①ルツが、誠意をもって買い戻しを要求していることを理解した。
②ナオミは、もっと近い買い戻しの権利のある親類がいるのを知らなかった。
③ボアズは、すべてが公明正大に行なわれるように計画を練る。
＊優先権のある親類が買い戻しを決意すれば、ルツはその人の妻なる。
＊ボアズは、すべてを主の御手に委ねた。

（3）行動するボアズ

①ボアズはルツに優しい言葉をかけ、朝まで彼女をそこで休ませた。
②ボアズはルツと彼女の土地を買い戻すために、行動を起こした。

Ⅴ．ボアズによる買戻し（4：1～12）

1．1～6 節

（1）町の門のところ

①ボアズは町の門のところに座り、買い戻しの権利のある人を待った。
②町の門は、会議の場となったり、裁判所となったり、市場となったりした。
③ボアズは、ここで公開の取引を行おうとした。
④どのような結論が出ようとも、風評被害が起こらないようにするため。
⑤ボアズは 10 人の長老をそこに招いた。

⑥法的に重要な評決を下すためには、10 人という人数が必要とされた。
⑦長老とは、老人という意味ではなく、町の役職を指す言葉である。
⑧10 人の長老の評決によって、結婚は正式なものとなる。

(2) 買戻しを断る親戚の人
①親戚の人は、一旦は買うと言いながら、「モアブの女ルツも買わねばならない」と聞かされると、前言を翻した。
②モアブ人に偏見を持っていたか、ルツが産む子に財産を持って行かれることを恐れたか。

2. 7～12 節
(1) はきものを渡す習慣
①取引を終えるに際して、相手に「はきもの」を脱いで渡す習慣があった。
②親類の人は、ボアズにそれを渡し、取引が完了したことを証明した。
③ボアズは、10 人の長老たちと町の人々の前で、自分がルツを買い戻したことを宣言した。
④「死んだ者の名を、その身内の者たちの間から絶えさせないために」、ルツを買い戻したのである。

(2) 町の人々と長老たちからの祝福
①町の人々と長老たちは、この結婚の証人となった。
②彼らはボアズの信仰をたたえ、彼に祝福の言葉を贈った。

Ⅵ. ダビデの家系（4：13～22）

1. 13～17 節 a
(1) 結婚と出産
①ボアズは信仰によってルツをめとった。
②それは神の計画であると同時に、ボアズ自身の主体的な選びでもあった。
③ルツもまた、信仰によってイスラエルの神の翼の元に身を寄せることを決断した。
④その結果、彼らに男の子が与えられた。
⑤この子の子孫の中からメシアが誕生するようになる。

(2) ナオミの喜び
①町の女たちは、「この子の名は、オベデ―仕える者―です」と言った。

②町の女たちがつけたあだ名が、そのままこの子の名となった。

2. 17b～22 節

（1）系図

①オベデはエッサイの父となった。

②そのエッサイから、ダビデが誕生する。

③そのダビデの子孫からメシアが誕生する。

結論

1. ルツ記に登場する型について

（1）ボアズは、イエス・キリストの型である。

①ボアズいう名には、「彼には力が宿る」という意味がある。

②ボアズは裕福な資産家であり、気力、体力ともに充実した男であった。

③しかし、彼を町一番の人格者に仕立て上げているのは、彼がモーセの律法に精通しているという事実であった。

④ユダヤ人の伝承では、当時ボアズは 80 歳、ルツは 40 歳とされている。

⑤ボアズはルツを買い戻したという意味で、イエス・キリストの型である。

（2）ルツは、教会の型である。

①ルツは、異邦人の女であった。

②ボアズに買い戻されたことにより、メシアの系図に名を連ねるようになった。

③彼女は、ボアズの花嫁となったという意味で、教会の型である。

2. 神の目に見えない手について

（1）神の目に見えない手を、摂理という。

（2）通常は、神は摂理を通して働かれる。

（3）神の恵み「ヘセッド」がキーワードである。

3. 信仰と不信仰の対比について

（1）士師記とルツ記

（2）ベツレヘムからの脱出とベツレヘムへの帰還

（3）オルパとルツ

（4）買戻しを拒否した親戚とボアズ

（5）私たちの側に信仰があることが、神の計画が進展するための条件である。

60 分でわかる旧約聖書（9）「サムエル記第一」

1. はじめに

（1）書名

①本来は「サムエル記」という一書である。

②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。

③それ以降、その習慣が定着した（ヘブル語聖書も同様）。

④「サムエル記」という書名は、サムエルが著者だからではない。

⑤サムエルが最初に登場し、中心人物として活躍するので、この名が付いた。

（2）著者

①サムエル記第一は、1：1～25：1 までサムエルが書いた可能性がある。

＊25：1 で、サムエルは死んでいる。

②サムエルの下で学んだ預言者のひとりが、まとめた可能性もある。

＊サムエルが書き残した資料を利用した。

③祭司エブヤタル（アビアタル）が、資料をまとめた可能性もある。

＊彼は、ダビデと行動をともにしている（22：20～23 参照）。

（3）内容

①サムエル記全体は、前 1120 年頃から約 150 年間の出来事を記している。

＊士師の時代から王政時代への移行を説明する非常に重要な書である。

②士師記の時代（混乱した時代）が約 300 年間続いた。

＊政治的、宗教的、道徳的崩壊が進んだ時代

＊士 21：25

Jdg 21:25　そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた。

③祭司たちでさえも堕落した時代

④国が崩壊の危機に直面した時、神の介入があった。

⑤ハンナの祈りに答えて、神はサムエルをイスラエルに与えた。

⑥サムエルのリーダーシップの下、国は立ち直って行く。

⑦サムエルの息子たちは、後継者になる器ではなかった。

⑧そこから、イスラエルは王政に移行する。

⑨サウルが初代の王、ダビデが二代目の王となった。

⑩サムエル記第一は、サムエル、サウル、そしてダビデの物語である。

2. アウトライン

1. サムエルの物語（1～9 章）
   (1) 誕生（1：1～2：11）
   (2) 召命（2：12～3：21）
   (3) 契約の箱（4：1～7：17）
   (4) 王を求める民（8：1～9：27）

2. サウルの物語（10～15 章）
   (1) 油注ぎ（10：1～11：15）
   (2) サムエルの告別の辞（12：1～25）
   (3) 不従順の罪（13：1～15：35）

3. ダビデの物語（16～30 章）
   (1) 油注ぎ（16：1～13）
   (2) 王宮での奉仕（16：14～23）
   (3) ゴリヤテとの戦い（17：1～58）
   (4) ミカルとの結婚（18：1～30）
   (5) 逃亡生活（19：1～26：25）
   (6) ペリシテの地での生活（27：1～30：31）
   (7) サウルの死（31：1～13）

3. 結論（物語の背後に神学的意味がある）
   (1) 祈りの重要性
   (2) 王国の誕生
   (3) 預言者の出現

サムエル記第一を通して、イエス・キリストによる救いの土台について考える。

Ⅰ．サムエルの物語（1～9 章）

1. 誕生（1：1～2：11）

(1) エルカナには 2 人の妻（ペニンナとハンナ）がいた。
①ハンナは不妊の女であり、ペニンナの陰湿ないじめに会っていた。
②人間的に見れば不幸なことが、神の計画のために用いられる。

(2) ハンナは、シロにある幕屋で祈り、【主】に誓願を立てた。
①もし男の子が与えられるなら、その子を幕屋で仕える者として捧げる。
②つまり、その男の子を「生まれながらのナジル人」にするということ。

(3) 男の子が誕生し、サムエルと命名された。

①母親が命名した。

②サムエルとは、「神が聞いてくださった」という意味である。

③幼子が乳離れすると（およそ 3 歳）、ハンナはその子を【主】に捧げた。

④サムエルは、偉大な士師、祭司、預言者となる。

(4) ハンナの賛歌

①この賛歌は、人生の逆転を経験した者が【主】の恵みをほめ歌ったもの。

②メシア的王国の預言も含んでいる。

③1 サム 2：10

1Sa 2:10　【主】は、はむかう者を打ち砕き、／その者に、天から雷鳴を響かせられます。／【主】は地の果て果てまでさばき、／ご自分の王に力を授け、／主に油そそがれた者の角を高く上げられます。」

④マリアの賛歌（ルカ 1：46～55）は、ハンナの賛歌から影響を受けている。

2. 召命（2：12～3：21）

(1) 祭司たちの堕落

①大祭司エリの息子たちは、よこしまな者たちであった。

＊和解のいけにえを、私腹を肥やすために取っていた。

＊道徳的罪を犯していた。

②エリは、子どもの教育を誤った。

③幼子サムエルは、自分にできる範囲で【主】の前に仕えていた。

④肉体的にも知的にも、成長し、神と人とに愛される人物となっていった。

⑤幼子イエスの成長を解説する言葉と非常によく似ている。

「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人とに愛された」（ルカ 2：52）

⑥時代は、祭司たちの時代から、預言者たちの時代に移行しようとしていた。

(2) 合計 4 回の【主】からの呼びかけ

①最初の 3 回は、エリからのものと誤解した。

②4 回目に、「お話しください。しもべは聞いております」と応答した。

③この時から、サムエルは祭司として、また預言者として働くようになった。

3. 契約の箱（4：1～7：17）

(1) ペリシテ人との戦い

①指導者の誤った判断：契約の箱を戦場に運ぶ。
②イスラエルの歩兵 3 万人が倒れた。
③エリの息子、ホフニとピネハスが死んだ。
④神の箱（契約の箱）が奪われた。
⑤エリは、その衝撃で倒れ、死ぬ。

(2) 神の箱は、ペリシテ人の偶像神ダゴンに勝利した。
①アシュドデ→ガテ→エクロンと回された。
②最後は、イスラエル西端の地ベテ・シェメシュに戻された。

(3) ベテ・シェメシュの人たちは、箱の中を見て打たれた。
①箱は、キリヤテ・エアリム（ユダの山地）に移された。
②アビナダブの家は、祝された。

(4) それから 20 年後に、サムエルの公の働きが始まった。
①ミツパ（エルサレムの北 10 キロ）でリバイバル集会が行われた。
②その直後、ペリシテ人が攻めて来るが、【主】は雷鳴によって勝利された。
③サムエルは、各地を巡回し、士師としての役割を果たした。
④ベテル、ギルガル、ミツパに「預言者のための学校」を設立した。

4. 王を求める民（8：1～9：27）

(1) サムエルの 2 人の息子（ヨエルとアビヤ）も、罪を犯していた。
①後継者がいない状態で、民は王を求めた。
②軍事的リーダーが欲しいという求めであった。
③内面の改革をしないで、外面だけを整えようとする動きである。

(2) サムエルは落胆した。
①王を求めることは、神を拒否したことである。
②王は、民に大きな犠牲を強いる。
③しかし民は、他のすべての国民のようになることを求めた。

(3) 神の許容的御心
①神は、イスラエルに王が必要となることを知っておられた。
②民が王を求める状況とタイミングが間違っていた。
③神は、サムエルとサウルの出会いを用意された。

Ⅱ．サウルの物語（10～15 章）

1．油注ぎ（10：1～11：15）

（1）サムエルは秘密裏に、サウルに油注ぎをした。

①ヘブル語のメシアという言葉は、「油注がれた者」という意味。

②サウルは、劣等感と優越感の間を揺れ動く人物である。

（2）サウルは、アモン人との戦いに勝利し、民の信頼を得た。

①ギルガルで王権の更新が行なわれた。

②民は和解のいけにえを捧げ、「契約の食事」によってこれを喜んだ。

2．サムエルの告別の辞（12：1～25）

（1）告別の辞の内容

①自らの役割の終了と、身の潔白を民に告げた。

②民の不従順を指摘した。

（2）サムエルが祈ると、時期はずれの雨が雷を伴って降って来た。

①士師の時代から王政への移行が完了した。

3．不従順の罪（13：1～15：35）

（1）ギルガルでの不従順の罪

①サムエルの到着を待ちきれず、自ら全焼のいけにえを捧げた。

（2）息子ヨナタンの勝利を自分の手柄にした。

（3）アマレクを聖絶せよとの命令に違反した。

①遊牧の民アマレク人は、エサウの子孫だった（創世記 36：12）。

②エジプトを出て荒野を旅する民を背後から襲った（出 17：8～16）。

③その事件から、すでに 400 年ほど経過していた。

④【主】はアブラハム契約のゆえに、アマレク人の聖絶をサウルに命じた。

⑤しかしサウルは、最上の羊を残し、王アガグを生かしておいた。

⑥サウルが王座から追われることが決まった。

Ⅲ．ダビデの物語（16～30 章）

1．油注ぎ（16：1～13）

（1）【主】はサムエルに、次期の王が誰であるかを示された。
①ベツレヘムのエッサイの息子たち
②8 人兄弟の末っ子のダビデが選ばれた。

（2）油注ぎ
①サムエルは、兄弟たちの真ん中で、ダビデに油注ぎをした。
＊ダビデとは、「愛された者」という意味である。
②【主】の霊がダビデに注がれた。
③同じ霊が、サウルから離れ去った。

（3）サウルの精神的な病
①悪霊の攻撃
②抑圧、不安、うつ状態、自殺願望、被害妄想の幻聴
③家来たちが琴の名手を呼ぶことを提案した。今で言う音楽療法である。
④家来の中にダビデのことを知っている者がいて、ダビデを推薦した。
＊これは、神の摂理である。

2. 王宮での奉仕（16：14～23）

（1）ダビデを紹介した若者は、ダビデのことをこう描写した。
①琴の名手、勇士、戦士、ことばに分別のある人、体格の良い人。
②ダビデはまだ戦いに出たことはなかった。
③しかし、ライオンや熊などの野獣と戦っていたので、戦士と呼ばれた。

（2）サウルはダビデを気に入り、道具持ちとして召し抱えた。
①道具持ちとは、文字どおり王の武具を運ぶ者である。
②それはまた近衛兵でもある。
③ダビデが次期王として油注ぎを受けていることは、サウルはまだ知らない。
④ダビデが宮廷に住むのは、王になるための訓練でもある。
⑤ここで、【主】がサウルに悪霊を送った理由が、明らかになる。

3. ゴリヤテとの戦い（17：1～58）

（1）ペリシテ人との戦い
①ペリシテ人は、代表戦士同士の戦いによる決着を提案した。
②ペリシテ側の代表戦士は巨人ゴリヤテ
＊身長は 3m 近くあり、50kg を超える青銅の鎧で、完全武装をしていた。
③イスラエル人は意気消沈し、非常に恐れた。

(2) 父の使いで戦場に行くダビデ
①ダビデは自分がゴリヤテと戦うと申し出た。
②兄のエリヤブは、軽蔑した。
③サウルは、ダビデを低く評価した。
＊ダビデに自分の鎧を与えたが、ダビデはそれを脱いだ。

(3) ダビデの戦略
①万軍の【主】の御名によって戦った。
②使い慣れた武器（石投げ）を使った。
③戦略があった。

4. ミカルとの結婚（18：1～30）

(1) ダビデは、サウルによって職業軍人として召し抱えられた。
①これ以降、サウルの側近として生活するようになる。

(2) サウルの息子ヨナタンは、ダビデを自分と同じほどに愛した。
①ダビデと兄弟契約を結んだ。

(3) しかしサウルは、ダビデを疑いの目で見るようになった。
①槍でダビデを殺そうとした。
②ダビデをペリシテ人との戦いに出し、戦死するように画策した。
③もし勝利すれば、娘のミカルを与えると約束した。
④結果的に、ミカルはダビデの妻となった。

5. 逃亡生活（19：1～26：25）

(1) サウルは再びダビデを殺そうとした（19 章）。
(2) ヨナタンがダビデの逃亡を助けた（20 章）。
(3) ダビデは、ノブとガテに逃れた（21 章）。
①ノブは、幕屋のあった地。
②ガテは、ペリシテの 5 大都市のひとつ。
(4) サウルは祭司たち全員を虐殺した（22 章）。
①エドム人ドエグの密告
(5) ダビデはペリシテ人と戦い、サウルはダビデを追跡した（23 章）。
(6) エン・ゲディの野でダビデはサウルの命を助けた（24 章）。
(7) ダビデは、ナバルの妻アビガイルと結婚した（25 章）。

（8）ダビデは、ジフの荒野で再びサウルの命を助けた（26 章）

6. ペリシテの地での生活（27：1～30：31）

（1）ダビデは、ガテの王アキシュのもとに身を寄せた。

①信仰の揺らぎが見える。

②ペリシテ人の軍勢に参加すれば、イスラエルの民と戦うようになる。

（2）サウルもまた最悪の状態になった。

①エン・ドルの霊媒女を訪問し、サムエルを会おうとした。

②霊媒師を用いるのは、律法違反である。

③本物のサムエルが登場したので、霊媒師は驚いた。

④サムエルは、王権はダビデに渡されたと告げた。

（3）ダビデは、ツィケラグを襲ったアマレク人を滅ぼした。

①当時、ダビデの軍勢は 400 人。

7. サウルの死（31：1～13）

（1）ギルボア山でのペリシテ人との戦い

①サウルの 4 人の息子のうち 3 人までが戦死した。

＊ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュア

②サウルは、ペリシテ軍の集中攻撃を受け、重傷を負った。

＊剣の上に倒れ伏して、自殺した。

（2）ペリシテ人は、サウルの首を切り、武具をはぎ取った。

①サウルの首は、ダゴンの神殿にさらされた。

②武具はアシュタロテ神殿に納められた。

③首から下は、ベテ・シャンの城壁に打ち付けられた。

③サウルの 3 人の息子たちの遺体も、その城壁に打ち付けられた。

（3）ヤベシュ・ギルアデの住民が、それらの遺体を回収した。

①彼らは、遺体を火葬に付し、遺骨をその地に葬った。

結論：歴史的事件の内にある神学的意味

1. 祈りの重要性

（1）1 サムの始まり

①ハンナの祈り

②取るに足りないひとりの女の祈りが、イスラエルの歴史を変えた。
③神は、サムエルという器をイスラエルに、また全人類に与えた。
(2) 2 サムの終わり
①ダビデの祈り
②アラウナの麦打ち場を買い、そこに祭壇を築いてささげ物を捧げ、祈った。
③ここに、神殿が建つことになる。
(3) 神は、小さな祈りに応えて、大きなことを始めてくださる。

3. 預言者の出現
(1) サムエル以前にも預言者と呼ばれる人たちがいた。
①アブラハムは預言者と呼ばれている（創 20：7）。
(2) サムエルは「預言者の時代」の最初の預言者となった。
(3) 士師たちの時代には、祭司たちが霊的指導者として任命された。
①しかし、祭司たちは堕落した。
(4) 王政に移行する段階で、預言者たちが霊的指導者として任命された。
①霊的権威は、祭司から預言者に移行した。

2. 王国の誕生
(1) イスラエルは、神政政治から王政に移行した。
(2) 神の統治は、神が立てた王によって地上で執行される。
①神は、ダビデとその子孫たちを正当な王として任命された。
②2 サム 7 章のダビデ契約は、非常な契約である。
(3) ダビデ王国は、将来地上に成就する「神の国」の予表となる。
(4) 理想の王国実現のために必要な 3 つのもの
①正義によって権威を行使する王
②神への信頼を土台に統治する王
③神への従順を土台に統治する王
(5) 理想の王と理想の王国
①理想の王は、イエス・キリストである。
＊イエス・キリストは、ダビデの子である。
②理想の王国は、メシア的王国（千年王国）である。
＊これが、旧約聖書の預言のピークである。
(6) 新約時代に生きる信者への希望
①マタ 3：1～2

Mat 3:1　そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。
Mat 3:2　「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

②「天の御国」とは、メシア的王国のことである。
③ユダヤ人たちは、イエスを拒否し、御国を受け取ることを拒否した。
④その結果、異邦人が救われる時代に入った。
⑤しかし、神の計画は挫折していない。
⑥メシアの再臨の先にある千年王国の希望は、今もイスラエルのものであり、私たち異邦人信者のものである。

60 分でわかる旧約聖書（10）　「サムエル記第二」

1. はじめに

（1）書名

①本来は「サムエル記」という一書である。

②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。

③それ以降、その習慣が定着した（ヘブル語聖書も同様）。

④サムエルが最初に登場し、中心人物として活躍するので、この名が付いた。

（2）内容

①サムエル記全体は、前 1120 年頃から約 150 年間の出来事を記している。

②サムエル記から列王記までの歴史書の流れ

＊単独の王国（ユダ族のみ）

＊統一王国（12 部族すべて）

＊統一王国（ソロモンが継承）

＊単独の王国（ユダ族とベニヤミン族）

2. アウトライン

Ⅰ．権威ある座に上るダビデ（1～10 章）

1. サウルとヨナタンの死（1：1～27）
2. ヘブロンでの即位（2：1～4：12）
3. 統一王国の王として統治（5：1～10：19）
   - （1）エルサレム遷都（5：1～25）
   - （2）神の箱の移動（6：1～23）
   - （3）ダビデ契約の締結（7：1～29）
   - （4）外敵に対する勝利（8：1～18）

Ⅱ．権威ある座から転落するダビデ（11～20 章）

1. バテ・シェバとウリヤに対する罪（11：1～12：31）
2. 家族問題（13：1～14：33）
3. アブシャロムの謀反（15：1～20：26）

Ⅲ．補足説明（21～24 章）

3. 結論（物語の背後に神学的意味がある）

（1）ダビデ契約（7：1～29）

（2）ダビデの最後の言葉（23：1～7）

サムエル記第二を通して、ダビデの生涯の意味について考える。

Ⅰ．権威ある座に上るダビデ（1～10 章）

1．サウルとヨナタンの死（1：1～27）

（1）主によって開かれた扉

①試練の中にありながら、ダビデはすべての状況を主に委ねていた。

②彼はサウルの死を望んではいなかった。

③そのダビデのために、突如扉が開かれた。

④時が良くても悪くても、主に信頼することを学ぼうではないか。

（2）ダビデの悲しみ

①アマレク人の若者が、褒賞目当てに、サウルとヨナタンの訃報をもたらした。

②ダビデは、深い悲しみと哀悼の意を表わした。演技ではない。

③アマレク人の若者は、処刑された。

（3）弓の歌

①ダビデは、サウルとヨナタンのために哀歌を作った。

②これをユダの子らに教えるように命じた。

③3 連から成る哀歌で、各連の始まりが「ああ、勇士たちは倒れた」である。

2．ヘブロンでの即位（2：1～4：12）

（1）主の指示を仰ぐ

①次の行動に移るために、主にお伺いを立てる。

②主はダビデに、ヘブロンを示された。

＊ユダ部族の中心の町、父祖アブラハムの墓のある町

（2）油注ぎ

①ヘブロンの長老たちは、ダビデに油を注ぎ、王とした。

②預言者サムエルによる油注ぎに続く第 2 の油注ぎであった。

③ダビデは「ユダの家」だけのための王となった。

④この時からヘブロンがダビデ王国の首都となった。

⑤サムエルによって油注がれ、主の霊の注ぎを受けたのは、十数年も前のこと。

⑥ヘブロンで油注ぎを受けた時、ダビデは 30 歳になっていた。

⑦主の器は、一朝一夕で完成するものではない。

（3）ダビデの忍耐

①彼が統一王国の王になるのに、さらに 7 年半かかった。

②ダビデを有能な王、またより成長した主の器に育てるための神の計画。

③ダビデは、メシアであるイエスの型である。

④イエスはメシアとしての油注ぎを受けていたが、民は信じなかった。

⑤ダビデは統一王国の王としての油注ぎを受けていたが、民は認めなかった。

3．統一王国の王として統治（5：1～10：19）

（1）エルサレム遷都（5：1～25）

①サウルの息子イシュ・ボシェテの死

②イスラエルの 10 部族の長老たちがダビデに油を注ぎ、王として迎えた。

③ダビデが油注ぎを受けるのは、これが 3 度目。

④ダビデの在位期間は 40 年（ヘブロンで 7 年 6 ヶ月、エルサレムで 33 年）。

⑤30 歳で王となり、70 歳まで王として統治した。

⑥エルサレム遷都の理由

＊中間の町

＊防衛上の理由

＊ギホンの泉

⑦神ご自身がエルサレムを神の都として選ばれた。

（2）神の箱の移動（6：1～23）

①神の箱はキルヤテ・エアリムのアビナダブの家に安置されたままであった。

②神の箱をエルサレムに運び上ることは、国家的な事業であった。

③ダビデはイスラエルの精鋭 3 万人集め、この事業に当たろうとした。

④前王のサウルは、神の命令と神の箱を顧みようとしなかった。

⑤ダビデは、神の命令と神の箱に対する敬意を表明した。

⑥ダビデは、神の箱を新しい車に載せて運んだが、これが問題であった。

⑦ウザは、神の箱に手を伸ばしたため、その場で即死した。

⑧2 度目は、モーセの律法が命じるとおりにレビ人たちが主の箱を担いだ。

⑨このときダビデは、主の前で力の限り踊った。

⑩さげすんだ妻のミカルは、生涯子を産むことがなかった。

⑪神の箱は、所定の天幕の真中に安置された。

（3）ダビデ契約の締結（7：1～29）

①ダビデは、神の箱のために神殿を建てたいと願う。

②預言者ナタンを通して主のことばが届けられる。

③戦士ダビデではなく、ダビデから出る世継ぎの子が神殿を建設する。
④それに続いて、ダビデ契約が締結される。
＊無条件契約、永遠の契約である。
＊アブラハム契約やシナイ契約に匹敵するほど重要な契約である。

（4）外敵に対する勝利（8：1～10：19）
①ペリシテ
②モアブ
③北方の小国ツォバ
④ダマスコのアラム

Ⅱ．権威ある座から転落するダビデ（11～20 章）

1．バテ・シェバとウリヤに対する罪（11：1～12：31）

（1）誘惑の舞台設定
①「年が改まり」。雨季から乾季に入ると、戦争ができる状態になる。
②アモン人との戦いが再開された（10：14 で一時中断していた戦い）。
③ダビデは、将軍ヨアブを指揮官とし、自分はエルサレムの王宮に留まった。
④それが、ダビデが誘惑に会うための舞台を用意した。

（2）罪の内容
①バテ・シェバと姦淫の罪を犯した。
②ウリヤを殺害した。

（3）罪の結果
①側近の信頼を失った。
＊将軍ヨアブの暴走が始まった。
②民の信頼を失った。
③国家でも個人でも、正義を行えば祝され、それに反すれば呪われる。

（4）預言者ナタンの糾弾と詩 51 篇
①自分が犯した罪は、何よりも主に対するものであった。
②自分には、弁解の余地がない。
③罪の結果、聖霊が取り去られ、自分は神の臨在から切り離された。
④しかし、神の恵みによって神に立ち返ることができると信じる。

（5）バテ・シェバを妻に迎える。
①最初の子は死ぬ。
②次に生まれたのがソロモンである。

2．家族問題（13：1～14：33）
（1）家族内での近親相姦と兄弟殺しの悲劇
①アムノンが異母妹であるタマルを強姦する。
②アブシャロムは、2 年後に長兄アムノンを暗殺する。

（2）ダビデはアブシャロムに対してあいまいな態度を取る。
①息子のことである。
②自分自身も問題を犯した。

3．アブシャロムの謀反（15：20：26）
（1）4 年かけて準備し、ヘブロンで蜂起した。
①ユダ族の人たちの心を掴む作戦

（2）ダビデの都落ち
①敵と味方が明らかになる。

（3）アブシャロムの死
①ヨアブは王の命令に背いて、アブシャロムを殺した。

（4）ダビデの復権
①ダビデは最後まで、ヨアブに対して強い態度を取ることができなかった。
②ヨアブに弱みを握られているから。

Ⅲ．補足説明（21～24 章）

結論：歴史的事件の内にある神学的意味

1．ダビデ契約（7：1～29）

（1）2 サム 7：4～17（ソロモンに焦点を合わせた契約内容）

2Sa 7:14　わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。

(2) 1 歴 17：7～14（メシアに焦点を合わせた契約内容）

1Ch 17:13　わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。わたしはわたしの恵みをあなたの先にいた者から取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。

1Ch 17:14　わたしは、彼をわたしの家とわたしの王国の中に、とこしえまでも立たせる。彼の王座は、とこしえまでも堅く立つ。」

(3) ダビデ契約の本質（無条件契約）

①アブラム契約の「子孫」の条項に関係している。

②ユダ族の中のどの家系からメシアが誕生するかを明らかにした。

③ダビデの息子の 1 人が王座を確立し、神殿を建設する。

④その息子は、罪を犯したなら罰を受けるが王位から退けられることはない。

⑤メシアはダビデの家系から出る。

⑥その王国は、永久に確立される（メシア的王国）。

2. ダビデの最後の言葉（23：1～7）

2Sa 23:1　これはダビデの最後のことばである。／エッサイの子ダビデの告げたことば。／高くあげられた者、／ヤコブの神に油そそがれた者の告げたことば。／イスラエルの麗しい歌。

2Sa 23:2　「【主】の霊は、私を通して語り、／そのことばは、私の舌の上にある。

2Sa 23:3　イスラエルの神は仰せられた。／イスラエルの岩は私に語られた。／『義をもって人を治める者、／神を恐れて治める者は、

2Sa 23:4　太陽の上る朝の光、／雲一つない朝の光のようだ。／雨の後に、／地の若草を照らすようだ。』

2Sa 23:5　まことにわが家は、このように神とともにある。／とこしえの契約が私に立てられているからだ。／このすべては備えられ、また守られる。／まことに神は、私の救いと願いとを、／すべて、育て上げてくださる。

2Sa 23:6　よこしまな者は／いばらのように、みな投げ捨てられる。／手で取る値うちがないからだ。

2Sa 23:7　これに触れる者はだれでも、／鉄や槍の柄でこれを集め、／その場で、これらはことごとく／火で焼かれてしまう。」

(1) 遺言ではなく、ダビデの最後の詩、最後の預言という意味である。

①主の霊（聖霊）によって霊感を受けて語ったものである。

(2) この詩の内容

①名君とは、公義と敬虔をもって人々を治める王のことである。

＊そのような王は、さん然と輝く朝日のようであり、雨に濡れた若草を照らす日の光のようである。

＊それは、ダビデの子である主イエスの生涯を預言したことばでもある。

②彼は、自らの生涯を振り返り、自分が完璧でも義なる王でもなかったと感じている。

③しかし、とこしえの契約（ダビデ契約）のゆえに、不十分な自分でも主の守りの中にあることを信じ、主に感謝している。

④さらに、主は自分の救いを完成してくださるとの信仰を告白している。

⑤最後に彼は、「よこしまな支配者は人々に害と苦痛しか与えない存在であり、それに触れる者は傷を負わされるだけである。その者には苛酷なさばきと、滅亡とが待っている」と預言している。